

歴史意識の形成と生涯学習

——「風林火山」フィーバーをめぐる——

宮 坂 広 作

1. はじめに——テーマとモチーフ

今夏、「歴史」という文字が新聞の紙面に大きく躍った。参議院選挙で自由民主党が「歴史的敗北」を喫した、という報道である。「歴史的」とはどういう意味かを知るべく、新聞を詳細に読むと、戦後に参議院が設けられてから、3年ごとに選挙が行なわれてきた中で、このたびの選挙は与党の大惨敗に終わった過去2回の選挙と並ぶものだと書かれている。つまり、戦後の参議院選挙の歴史にあって記録的な敗戦だということであり、3回目の大敗だということである。ある社会事象の意味や特色を認識するためには、歴史的にふりかえって調べてみるが必要であり、かつ有益だということがわかる。与党の当選議員数で比較すると、今度の選挙は最低ではなく、下から2番目である。したがって、「歴史的敗北」ではあっても、「最大の敗北」ではない。さらに新聞は、これまでの2回の敗北で時の総理大臣が職を辞していることをつたえ、現在の首相が辞職する可能性についてふれた。これは、「先例にならう」という歴史的認識とそれにもとづく行動が予測されている訳である。

「歴史的認識」といえば、ここ数年間このことばが、ジャーナリズムでさかんに用いられてきた。具体的には、前回の戦争、つまり日中戦争や「大東亜戦争」（「太平洋戦争」）の本質や意味についてどう考えるかという問題である。それをとくに韓国や中国のような近隣諸国からきびしく問われたのである。直接的な契機になったのは、時の首相の靖国神社参拝や教科書の改訂、慰安婦問題などであった。事柄の本質は、さきの戦争を「侵略戦争」として認めるか、それについて正式に謝罪を行なうかということである。それについて時の首相は、歴史的評価というのは多様であって、後世の歴史家にゆだねるべきものという見解であるらしい。首相就任直後に議会で野党からしつこくその歴史的認識を問いただされたのは、この首相がかねてから「戦後レジームの改廃」や「憲法改正」を掲げる保守的（あるいは反動的）イデオロギーの持ち主であることに目を付けた野党が、この人物から大東亜戦争肯定論や反韓・反中の言説でも引き出せればという狙いであつたろう。これに対して首相は「判断停止」というか「判断委譲」をすることで難を避けたのだったが、もちろん一国の政治的リーダー、国政の最高責任者が、己の歴史認識を公然と明快に表明できないようでは、リーダーたる責務を果たしえない訳である。この首相は、靖国神社に参拝したか否か

についても明言を避け、また今後の方針についても沈黙を守っていたが、その点「公約」したことだからと言って、近隣諸国がつよく反対するのを押し切ってまで参拝を強行した元首相の言動の方がはるかにわかりやすい。もちろん、それによってアジア諸国民の怒りを買い、アジア外交をだめにしてしまった当人の責任は重大である。

歴史認識の問題は、首相や外相、外交官や政治家に委せておけばよいということではない。筆者などは一介の大学教員であったが、勤めていた大学に中国や韓国からの留学生が来ていたし、それらの国からの訪問者を迎えたり、またそういう国に出向いて国際的な学会に参加することもあった。それらの場面でこちらの歴史認識が直接問われるようなことはあまりなく、学問の専門的分野での交流が主なものであったが、大連で行なわれた「満州国」教育史についての国際学会ではそれですまなかった。「満州国」というのは日本の傀儡であり、その建国以後も日本帝国主義の中国侵略が行なわれていたというのが、中国側研究者の歴史認識であり、そういう前提に立てば、「偽満州国」の教育政策・教育行政・教育実践は侵略行為以外のものではないということになる。これに対して日本側研究者の中には、満州国の教育、たとえば教科書を当時の日本国内で行なわれていたものと比べれば、むしろ進歩的とみなしうるものもあって、単純に愚民化政策ととらえることは当たらないと論ずる者もあった。これは、日中間の民族的対立というより、歴史を大局的につかんで「本質」を問う考え方と、より細部を具体的に掘り下げて実相を探ろうとする歴史的手法の対立と言うべきであろう。「イデオロギー的」と「実証的」とのちがいを言う方がわかりやすいかも知れない。

ふつうの市民にとっても、歴史認識・歴史意識は重要な役割を果たしているように思われる。筆者は15年前に東京を引きあげて郷里の諏訪に戻ったが、戦後「新産業都市」にも指定されて急速に工業化・都市化が進んだこの地域にあって、市の中心部からたった4キロメートルとはいえ山村ふうだった出生の地は、すっかり近郊住宅地に変わっていた。ところが在来の住民と新住の人びとのあいだにあまり摩擦がなく、これまでの集落の慣習がほとんどそのまま踏襲されている。かつて保守政党支部の幹部であり、かつ市長の子分として知られた某がこの集落を牛耳っていたが、いまでもその長男が集落の政治的支配者の位置を世襲している。市長選挙・議員選挙では「区の推薦」が行なわれ、実質的には区営選挙が営まれている。近くは伊勢神宮の式年祭費用の募集について、一戸当たり500円の奉賛金をお願いしたい旨、区長と神社総代連名の書類、つまり公文書が隣り組回覧板という公的ルートで配布された。つまり、ここでは近代化・民主化という時計の針が止まっており、住民の歴史意識は旧態依然である⁽¹⁾。

集落の民のあいだで政治的・宗教的な対立もなく、支配体制のゆるぎもない、この牧歌的な桃源郷の外はどうなっているのか。現実の社会は、国際的にはテロの暴力が

あり、これを鎮圧することを名分として、巨大軍事国家が大規模な戦争を遂行している。国内においても、経済のグローバリゼーションの結果として、企業間で激しい競争が行なわれており、格差社会の深刻化と共に個人間の生存競争が熾烈になっている。国家による保護はあまり期待できないので、各企業・産業はサバイバルのためにあらゆる手段を取るしかない。かくして極端な合理化が進められ、基幹的労働力としての正規社員数はギリギリに削減され、パートタイマーの数が増えていく。安定雇用の狭き門に入るために、子どもたちは学力競争・学歴競争に追い込まれ、ゆとりを失い、友人との協力的・親和的関係を持てなくなっている。こんにち、人びとを競争や戦争に駆り立てる巨大な力が、社会構造とりわけ経済構造から生まれていることは明らかである。

それ故に、われわれの現在当面する生活課題を認識し、それらの解決の方向を探るためには、戦後における高度経済成長の行きづまりと、その後における長い経済的停滞、さらにはグローバリゼーションへの積極的適応を旨とした小泉改革の是非について、改めて深く省察しなければならない。現代史についての探求は、市民にとって不可欠である。さらに一般化して言えば、歴史について無知であっては、正しい歴史認識・歴史意識を持つことは不可能であろう。しかし、歴史について学んだり、ゆたかな歴史的知識を所有すれば、必ず正しい歴史認識・歴史的意識が持てるという訳ではない⁽²⁾。もちろん、「正しい」とか「正しくない」とかいった基準をどう設定するかが問題の基本である。歴史を見る眼、歴史についての体系的な見方としての史観にはさまざまなものがあり、筆者はここでそのうちの何かひとつを真理として主張するつもりはない。それぞれの史観には一定の部分的真理が含まれており、仮説として有効なものがあるように思われる。もちろんどんな史観でも良いなどと言っているのではなく、珍説・邪説は拒否されなくてはならない。ただ、どのような史観も相対的真理であって、唯一絶対なものはないように思われるし、そうした多様な史観の対話と抗争の中から、より高次の真理が発見されるように努めるべきだということである。

庶民には歴史観などかわりがないかといえば、庶民にだって少なくともなんらかの歴史意識は存在するし、たとえそれが系統的・体系的なものでないとしても、ある程度まとまったパターンになっていることはありうる。戦後、筆者が現在居住している信州の諏訪地域では、戦争体験を記録するうごきが活発であった。それを推進したのは連合婦人会や公民館であった。高齢者の自分史サークルがやったばあいもある。この地域には戦中満洲開拓義勇軍の花嫁となり、敗戦によって大変な苦難を体験したという女性も多く、また新婚早々で夫を軍隊に取られ、未亡人になった女性もいる。それらの人びとが自分の受けた苦しみについて切々と語る体験記には、深く心を動かされる。戦争はいかに悲惨なものか、それを二度と起こしてはならないという末尾の

ことばにもリアリティがある。そこには戦争否定の痛切な思いと、時には自分たちをそんな目にあわせた当時の指導者への怒りが書き記されることもある。それは体験と結びつき、体験から生み出された歴史認識である。平和運動や憲法9条擁護の運動の関係者は、戦争体験を語る会や、戦争体験を書いた文集を刊行することで、厭戦・非戦のムードを高めようとする。

戦争の記憶を忘却させず、戦争体験を風化させないようにする努力は大切であり、そうした活動は大いに評価すべきである。筆者自身、かつて運営委員・チューターとしてかかわっていた世田谷市民大学で、自分史のクラスを担当したこともある。ここでは成人学生たちが、自分の個人的体験を客観的な歴史過程の中に位置づけるようにすることを勧めた。内容的には戦争に従軍した体験を回想するものが多かったが、中には製紙会社の工場長として住民の反公害闘争に直面した特異な体験や、自分の夫婦生活・家庭生活を総括してその意味を問おうとしたものがあり、それぞれに重い問題を含んでいた。しかし総じて私的なものと公的なもの、個人的なもの和社会的なものをつなげて、そのかかわりを追求していこうとする姿勢が弱く、不幸なめぐり合わせ、悲しい運命といった総括になってしまうばあいが多かった。まことに過去のできごとはいまさらどうにもならず、不運を甘受するしかないといった歴史意識、諦観が心を安らかにするようにみえた。

民衆が歴史意識を自己形成していくのは、まさに容易なことではない。その力をつけるためにこそ学校の歴史教育があり、教育的力量を身につけるために教師たちは進んでグループを作って共同研究し、また、教科書の弱点をカバーすべく、子どもたちのための歴史書を作成する努力も行なった。ただ、そうした史書がどこまで成功しえたか、疑問なしとしない。片や成人のための歴史講座が、公民館などで行なわれてきた。とくに郷土史講座は人気があり、多くの聴衆を集めるばあいが多かった。しかしながら、そこでの学習の質を問題にすれば、あまり高い評価は与えられない。成人の歴史学習の成果があがらない要因は、まず学習者の側の歴史意識の未成熟・幼稚さと、教育機会の提供者の見識の低さと、講師である歴史研究者の学問の質である。いささか「目八分に見て」ものを言っているようであるが、このたびの「風林火山」ブームの只中で、筆者が直接経験したことの帰結である。筆者の見解の是非を、読者によって断じていただきたい。

2. 民衆の歴史意識について考える

(1) 市民の歴史意識をめぐる問題

今年の春から夏にかけて、民衆の歴史意識という問題について考えさせられるできごとがいくつかあった。それは、筆者が属している地域学習団体の月例集会で発表さ

れた、会員たちの言説からであった。この会は、東京の大学を退職して郷里に戻った筆者がよびかけてつくったもので、すでに10年以上存続している。発表のテーマは発表者が自由に選んでよいことになっているので、政治・経済・社会・文化とあらゆる分野に及び、程度もさまざまである。ある会員はこの会について「サロンふう」と称したが、当たっているかもしれない。しかし、会合の場所は市立図書館の集会室であって宮廷ではないし、女性の会員はいるが貴婦人はいない。書画骨董など趣味に関するテーマを主として、楽しく語り合う会にしようという、まさにサロンの運営を希望する会員もいる。政治や宗教を話題にすると、意見の対立が激しくなりやすいのは事実なので、賢明なイギリス人はパーティの席でそうしたことにはふれないというのは、かつてその国に留学していたときに経験したことである。

しかし、そのイギリス人が、大学の演習や学会の集会では、それぞれ自分の意見を率直に述べ、激しい議論もあえて避けないことを知った。しかも、そのあとのコーヒブレイクや一杯やるときには、仲の良い友人に戻ってジョークなど交わしているのである。さすがにイギリスにおける民主主義の伝統は長く、市民社会が成熟しているということに深く感じ入ったものである。イギリスでの感動を日本に持ち帰り、この流儀で行動しようとしたら、理性の府であるはずの大学でも通用しなかったとぼやいた学者がいる。彼のばあいは一敗地に塗れてすぐ兜を脱いでしまったのかもしれないが、筆者のばあいは若くして教養学科イギリス分科というところに学んだので、イギリス流は先刻承知であり、そのスタイルで世間とつきあってきた。当然敬遠されたり、疎外されたりして、組織人としては惨めな境遇を甘受せざるをえなかったが、未だに転向しないでいる。だから、市民で構成する地域学習会でも、反対意見を真向から浴びせかけるし、誤りだと思うものは率直に指摘してはばからない。ただ、筆者のもの言いは信州人的口調そのもので、他郷の人が聞くとけんかでもしているのではないかと誤解するような陰しさがあるらしい。そのことはいつも妻から注意されているのだが、こんなに老齢になると容易には改められない。長い教員生活で身につけてしまった垢で、つい講義調・説得調が出て、聴いている人に不快感を与えるらしく、權威主義的・威圧的などと非難されさえする。

しかし、そのように非難する当人のばあい、相対主義・不可知論を信条としている。多様な意見はそれぞれに真理を包含しており、それなりに意味があるのだから、しいてひとつだけを真理だとするには及ばないという訳である。こういう態度は寛容でリベラルであり、おおらかで狂信的ではないというメリットはあるだろう。しかし、あるとき彼が、「自分は教会に行き、クリスチャンであるが、キリスト教を信仰している訳ではない」と言うのを聞き、驚愕してしまった。キリスト教を信じると公言しつつ、その信仰と背反するような行動をしている偽善者に比べれば、彼は正直なのであろうが、やはりこれは偽クリスチャンの一種と言うしかない。「主体」とか「自

我」など、近代哲学の中核をなした概念はもはや崩壊し、現代哲学では捨てて顧られないのだと彼は言うのだが、自我の一貫性も主体としての責任も欠如した人間の人格を信用することはできない。

彼の思考方法で特徴的なのは、「なるほど理論的にはそうなるだろうが、諸般の事情のためにそれは実行できない」という弁明である。ものごとは理屈どおりに行かないという常識を言っているのであれば、それは受容できる。ところが、その困難を十分検討し、打開の方法はないかを考えつめるというのではなく、困難を不実行の口実に行っているようにみえるところが問題なのである。学習会で歴史観とか史論について討議していたとき、彼は「歴史観や史論はいろいろあり、それらについて考察することは実に困難である」と発言した。そんなことは当然であり、マルクスだろうとウェーバーだろうと、それを正確に理解することは容易ではない。そんな原理論やグラント・セオリーではなくて、「信玄は英雄か悪鬼か」というテーマの答を見いだすこともらくではない。しかし、彼の言説は、「そんなむずかしい問題を解明しようとしても無理なので、初めから放棄した方がよい」という主張なのである。ひとりの人物が「一面では英雄であり、他面では悪鬼である」という認識は、多元的思考の成果であり、ものごとを単純化してしまわない良識である。しかし、彼のばあいはそうではなく、思考する前の断念であり、判断する前の放棄なのである。これではどんな歴史観も門前払いになってしまう。

もうひとりの会員のばあいは、史観とか史論とか言う以前の、事実認識についての誤り、思い込みの問題である。この人は、日本語や国語教育について専門的に学んだこともなく、資格もないのに、中国人に日本語を教えて成果をあげた、なかなかの人物である。彼は1980年、年齢48才にして中国語を市の公民館の講座で習い始め、二人の講師の発音はだめだったが、教材のNHKテキストを北京放送局のアナウンサーが読むのを聴いて、正しい発音を会得し、中国の大学生への日本語教育に従事した。この尊敬すべき会員が、月例学習会で日本人の漢字の使い方がいかにいいかげんかという、注目すべき発表を行なった。その中で、話の本筋からは外れる傍論・付説としてであったが、戦後日本の社会教育・生涯学習の歴史にかかわって、次のような意見を述べた。

「敗戦後、社会人に民主化教育の公民館活動は、昭和25年4月1日から生涯学習との転換は、日本人を戦前に同化させよが目的。官僚達は欣喜雀躍、お前らは主権者ではない！お前らは、我々の下にあると溜飲を下げた。表面は民主主義、裏面＝実際は官僚主義と、ウソとマコトの二重構造が、日本人をアホにした。「痴呆化教育」のたまものです。」

この言説は明らかに誤りなので、筆者はたちどころにそれを指摘した。相手は社会教育・生涯学習の分野では素人なのだから、その誤りを云々するなどというのは大人

気ない振舞いであるとは承知しているが、こういう意見を放置しておいたのでは、誤見がそのままかり通り、真実とされてしまうことになり、専門家・研究者としては不誠実になってしまうので、あえて発言したのである。まず、念のために、彼の言わんとするところは、「敗戦後、社会人の意識を民主化することを目ざして公民館活動がおこなわれたが、昭和25年に社会教育が生涯学習に転換されてからは、日本人を戦前と同じような意識に戻そうとすることが公民館活動の目的になった」ということかとたずねると、彼はそれを肯定した。まず、はっきりした誤りは、「生涯学習」ということばは、当時の中曽根首相が開設した「臨時教育審議会」（1984～7年）で打ち出されたものであり、それ以前は「生涯教育」といった。生涯教育ということばも、1965（昭和40）年12月にパリのユネスコで開かれた第三回世界成人教育推進委員会で、ラングランによって提起された概念であり、1950年代にはまったく使われたことはない。もちろん、生涯学習にせよ生涯教育にせよ、アメリカ占領軍が関与したしたものではないし、反動的な内容を持ったものとは言えない。

第二の問題点は、アメリカ占領軍の対日教育政策は、日本人の痴呆化を狙ったものかということである。これについては、内容上の問題以前に、戦後日本の教育改革は、六・三制をはじめすべてアメリカ占領軍の押しつけであり、日本側はやむなくそれを受入れたのだという言い方がよくなされることにかかわっている。さきに行なわれた教育基本法改正に当たって、憲法も教育基本法も占領軍から日本に押しつけられたものだという「メイド・イン・USA」説が改正推進派から意図的に宣伝されたが、当時の碩学・専門家で構成された「教育刷新委員会」の膨大な議事録を読んだ者は、戦後日本の教育改革が日本人の自主的な選択によって行なわれた面が大きいことを知る。少なくとも、憲法と教育基本法は同列に論じられるべきものではない。

アメリカ軍占領時代、日本の教育に対するアメリカ占領軍の影響——介入といってもよい——がつよく存在したことは事実である⁽³⁾。ここで問題にしている社会教育の分野でも、PTA導入についての文部省への指導、各都道府県における青年団・婦人会への直接指導など、さまざまな働きかけが行なわれ、それはアメリカ型の民主主義や生活様式の宣伝というイデオロギー教化的側面を持っていた。米・ソの冷戦型構造が強化され、朝鮮戦争のような熱戦が勃発する中で、アメリカの対日占領政策が、反共・反動化の方向を強めていったことも事実である。しかし、アメリカの教育政策や指導を「日本人痴呆化」とキメつけることは極論にすぎ、とても肯定できない。これは歴史評価・価値判断の次元に属することではあるが、占領時代の社会教育についての詳細な調査にもとづいて言えば、彼の意見は謬論である。ただし、占領下における米国と日本の関係をめぐる彼の史観には、一面の真理があることは認めるべきであろう。米国占領軍の日本民主化政策の裏面（ホンネ）をえぐり出すことは、当時アメリカ占領軍を解放軍とみなした日本の左翼よりは賢明だと言えるかもしれないし、アメ

リカの教育使節団の勧告書（ミッション・レポート）を、かつての「教育勅語謹解書」のような筆致で紹介・翻訳した日本の進歩的教育学者よりもリアリスティックだと言えるかもしれない。しかし、学習会の席上、アメリカ占領軍の日本民主化政策が百パーセント悪意に満ちたものだったとは思えないという意見も出されたし、とくに教育改革の分野では「教育基本法」であれ「六・三制」であれ、日本がわ当事者の主体性がかなりつらぬかれていたのは確かである。

学習会で筆者がそのことを述べても、彼は頑として自説を主張しつづけた。アメリカ占領軍が松川事件や帝銀事件を起こして日本人を畏怖させ、占領軍の言いなりにするよう工作したと断定し、これが占領軍・占領政策の本質だというのである。これらの事件について、状況証拠から言えば嫌疑濃厚ではあるものの、歴史家としては直接証拠なしとするしかない。彼はもともと裏面史とか意外史を好む傾向があり、表と裏、タテマエとホンネの「二重構造」でものごとを見ようとする。アメリカ占領軍や日本の官僚は、こういう二重構造をうまく使って日本国民を欺し、アホにされた日本国民は彼らの欺瞞を見抜けぬようになったというのが彼の見解である。歴代首相がワシントン詣で（「参勤交代」）をすることが示すように、今だに日本は米国の属国だと彼は主張する。

こういうケースについて筆者が思うのは、彼のようにひとかどの見識を持っている人にしてなお、事実誤認や思い込みによる歴史観に緊縛され、それに凝り固まっているという現実である。彼に対して好意を持つ筆者は、事実誤認の問題について真偽を確かめうる参考文献もいろいろあることから、ぜひ参観してみるように勧めた。しかし、彼はそうしようとしないので、筆者は彼と一時間にわたって話し合い、この問題も含めて意見交換をし、彼も理解するところがあったようにみえた。生涯学習の実践者は、すべからく真実・真理に対して忠実であるべきだ。頑迷やケチなプライドであくまで誤認や偏見を固守することこそがまさにアホではないか。彼は筆者とほぼ同じ年齢であるが、年をとると頑固になり、他者の意見に心を開かなくなることは、筆者自身が自戒するところである。しかし、批判されることを恐れる心理は真理探究を業とする学者の中にもつよいのだから、わが学習会のメンバーの中に、批判されることを極度に嫌がり、そうされると発言できなくなると泣きごとを言う者もあるのは不思議でない。正当な、根拠のある批判をも斥け、自分の主観や偏見をそのまま受容してくれることを欲するような人間の集合は、もはや自立した市民がさらなる自己変革を目指す生涯学習の理想とは遠い。こうした馴れ合いの「お友だち」集団には、内閣であれ学習会であれ、存在意義はない。

(2) NHK 大河ドラマにもの申す——ひとつのプロテスト——

2007（平成19）年のNHKの連続歴史劇（「大河ドラマ」）は、「風林火山」であり、原

作は井上靖、劇の主人公は山本勘助であった。井上は筆者の敬愛する作家であり、原作は長篇でないで、こういう作品をどう脚色して長丁場の大河ドラマに仕立てあげるのがかという興味はあった。しかしNHKの歴史ドラマをかつて観たときに、「動く講談」といった印象があったのでこの番組についての関心を失っていた。1988（昭和63）年、NHKが新田次郎作の『武田信玄』を同じ番組でやったことがあった。新田は同郷人であり、旧制中学の先輩ということ以上に、彼の生家、つまり藤原家は筆者の生家とは隣家であり、彼に深い影響を与えた彼の祖父は、筆者の父と親密であった。また、彼の末弟は中学で筆者より二級上の遊び相手で、両家の裏を流れている溪流でしばしばヤマメを追いまわした間柄であり、何代か前には両家は血縁関係にあった。そんな因縁からNHKドラマを見ようと思立ったのだが、どうにもつまらなくてすぐにやめてしまった。原作の方は大変長いものであったが、それより数年前なんとか読み通していた。NHKドラマの方は原作の単なる模写と見えたので、視聴を中断して時間をセーブしたのである。

「風林火山」の前宣伝がさかに行なわれるようになったころ、前述の地域学習会で筆者が親しくしている友人が、「武田信玄」のときの諏訪の扱われ方があまりひどかったので、彼が当時住んでいた山浦地方（八ヶ岳山麓のスロープに広がっている農村地帯）の人たちが、そこにある実家に帰省した新田次郎夫人に向かって、「お前ん様ちの旦那は、ほんとうにあんなひどいことを書いたんけ」と抗議したという話を筆者にした。この人は話をおもしろくする能力に長けているので、上記のエピソードの真偽のほどは疑わしかったが、少なくとも彼、YがNHKドラマにおける諏訪頼重の描かれ方につよい不満を持っていたことは真実だと思われた。Yは、こんどの「風林火山」でNHKがまたも諏訪人を蔑視するようなドラマを作らぬよう、あらかじめつよく申し入れるつもりだ、とも語った。

Yは革新的な政治思想の持ち主ではないが、大学では経済学を学び、市民的意識の持ち主のようにみえる。その彼が諏訪人という意識のもとに愛郷の精神を表出するのである。また彼は、大方の山浦人同様に諏訪神社（上社）の氏子だという意識をつよく持っており、7年に一度行なわれるこの神社の例祭（「御柱祭」）には積極的に参加する、という。筆者はそのことにつよい興味を感じ、NHKの「風林火山」にかかわって、この地域の民衆の歴史意識について調べてみたいと思うようになった。Yには、われらの学習会である「諏訪清談会」で発表することを要請し、それが行なわれたときの次の学習会には、筆者の所見を報告することを約した。Yはしかるべき準備ののち、「信玄周辺の人々によせる——諏訪人のレクイエム」と題する報告を2007年5月に行なった。Yの信玄観は、複雑な思いではあるがつまるところ否定的である。信玄の軍略・民治の実績は認め、また諏訪統治に当たって諏訪社の神事や御柱祭の復興に努めたことを多とするが、諏訪侵攻の際義弟の頼重を自刃させ、その娘を側室にする

という非道な仕打ちをしたことを、諏訪人としては許しがたいというのである。武田家滅亡の原因については、勝頼の凡庸を否定し、むしろ織田信長の謀略に応じて裏切りに走った武田武士団の現実的合理主義（損得勘定優先）の結果だ、とする。諏訪明神血脈につながる勝頼・信勝・諏訪御料人などの悲運に対し、諏訪人は深く同情し哀惜するが、信玄が上洛の途中病死して大望を実現しえなかったことに同情しないと述べる。

Yは上記のような信玄観が自分のみの主観ではなく、諏訪人の共通意識であるかのよう言うのだが、事実ははたしてどうなのであろうか。Yは知人などに「信玄をどう評価するか」を電話で問い合わせた結果を報告した。質問の仕方は、「信玄治世中、諏訪社神事の復興援助等の治績により、諏訪人の信玄に対する評価は高く、信玄公・信玄様という声は高い」とする郷土史家の見方についての感想を求めるというものであった。回答は、「そんなこと言ってるだけえ。かんがえられねえ。」（諏訪郡富士見町）・「信州での信玄の評価は低いよ。」（茅野市北山）・「西方衆としてさんざんな目にあっていることを知っている人はそんなことを言わないと思います。」（岡谷市）・「伊那の殿様はひどい目にあっていることを知っている人はそんなことを言いません。」

（伊那市高遠）・「当寺には典厩様の御墓所がある関係か、信玄公の人气は高く、また川中島一帯もそうです。」（長野市寺院）・「当地の一部には、真田昌幸が武田の被官だった関係か、信玄の評価の高い所もあります。」（上田市）・「信玄のようならくでもない人間のどこがよくてそんなこと調べているのか。酔狂なことだ。」（佐久市）・「思い出したくもない」（群馬下仁田）・「諏訪では信玄の評判はあまりよくないだと。ものをたずねるときは、場所柄や相手をよく考えてからしろ。」（甲府市）。以上、信玄の評判はあまりよくないように思われるが、Yは「信頼性の自信は正直ありません」と述べている。主に彼の友人・知人への問い合わせであるから、「類は友をよぶ」結果だったのかもしれない。

諏訪における信玄評価の要因について、Yはつぎのように分析する。プラス評価の要因は、①信玄治世の間諏訪は平穏で、信玄は諏訪社を保護し、祭事の復興に努めたこと ②諏訪の武士は武田軍の先方衆として戦い、武功に対し恩賞・感状を受けたこと ③甲州からの移住・混血が多かったこと（これは諏訪市頼重院の住職がYの問い合わせに対して答えた）の三つである。マイナス評価の要因は、①諏訪社信仰を口にしながら、同盟関係にあった諏訪領主頼重や弟の大祝頼高を殺し、娘を側室にしたこと ②西方衆を滅ぼしたことだとYは考える。Yはこうした「調査」を踏まえて、「諏訪や信州の人間は信玄に対して好意的だ」というのが定説だとする歴史家に対して疑問を呈し、そうした専門家の講演を聴いたあと、批判的・挑戦的な質問を行なった。NHKの番組ディレクターへの電話では、当人不在ということで接触できなかったが、電話を受けた職員に、「諏訪人をコケにしたら承知しない」という厳重な警告を行なっ

たという。職員の返答は、「まあ、なにしろドラマのことだからフィクションの入るのはお許しいただきたい」という趣旨であったとのことである。

愛郷心からディレクターにプレッシャーをかけたり、まして受信料不払いをちらつかせるような振舞いは行きすぎである。それに愛郷心というのは偏狭な愛国心につながりやすく、閉ざされたナショナリズムに堕しやすいことを警戒しなければならない。「甲府や山梨では信玄と呼び捨てにしたら、生命の保証はない」などというのはジョークであろうが、郷土愛から信玄を尊崇し、理想化するのであれば、Yと同列ということになる⁽⁴⁾。実は、Yが学習と抗議のために出席した「風林火山」関連の講演会というのは、「風林火山」フィーバーの中、それをさらにもりあげるべく諏訪地方の公民館・博物館・公共団体・民間団体などが競って開催したものである。NHKのドラマは、フィクションでありロマンであるといって史実を無視できるのだが、真実・真相を明らかにしたいというのが講演会主催者の意図であろうから、その姿勢は学問的・教育的なものとして評価すべきである。この種の講演会が諏訪地方でとくにさかんに行なわれたように思われるのは、筆者の愛郷心を満足させるゆえんである。

しかしながら、その種講演会に招かれた講師のほとんどが、山梨県人または山梨県出身者だったことをどう考えればよいのだろうか。もともと長野県の地方史研究では、中世史の分野が不振であった⁽⁵⁾。これと対照的に山梨県では戦国時代史、とくに武田信玄の研究がさかんであった。戦前からの伝統・蓄積があり、量・質ともに高い水準にある。それはなんといっても、武田信玄という巨人がいたからである。子どものときから信玄を偉大な人物と聞いていれば、いやでも関心を持ち、憧れもしよう。このたび諏訪で行なわれた講演会で、NHK ドラマの歴史考証に当たっているという、実証主義史家として高名な講師が山梨県の出身だということで、講演終了後の質問時間を利用して、信玄研究を専門とされるに至った動機をおたずねした。回答はこちらの期待に反して、「格別にはない。たまたまということです」であった。聴衆多数のいるところで小うるさい質問をしかけたものだから、研究者の隠微な内面をほじくり出そうとするいやらしい質問だと思って、相手にしなかったのかもしれない。山梨県人と信玄研究という取り合わせが、「偶然・たまたま」でできる訳がない。いろいろな人や情報との出会いの中で、関心が生まれ育ち、ついに一生の仕事になったはずである。そもそも主体的な選択ではなく、いかげんななりゆきから行なわれる研究など、意味のある成果を生むべくもないのである。

(3) 甲州人の武田信玄論

拙稿では「民衆の歴史意識」を問題にしているので、前節におけるYとパラレルに、甲州人としての立場を標榜している山梨県人で、かつ「民衆」といえるような人の史論を聞いてみたいところである。Yがやった電話インタビューの手法を踏襲すれ

ば、ある程度の量の情報は採集できるだろう。しかしそれでは、Yの場合と同じく底の浅い批判や印象にとどまってしまう、大した成果は得られないこと必定である。そこで、甲州人の民衆ではなく、歴史の専門家や研究者の所見を聞くことにした。といっても直接のインタビューではなく、著作で述べられているものについて学ぶことにした。次章で諏訪人・信州人の歴史家の見解をとりあげるのも、それとパラレルなものということになる。研究者・専門家でも民衆と共通な部分を持っているし、相互に影響しあっているということもある。両者は必ずしも隔絶した関係にはない。

甲州人の研究者で信玄びいきの代表的人物は、上野晴朗氏だと思われる⁽⁶⁾。信玄を高く評価していることを氏は明言し、その根拠について弁証している。こういう立場の明示を、研究者の多くが避けようとする。真理の探求が学問の目的であり、あくまで中立的・客観的であることが研究者には要請されるという自製の念からそうするのであろう。しかし、社会科学の研究において、純粋に客観的・中立的でありうるかという問題があるし、また、そもそもそういう立場を取れることが正しいかという根本的な問題がある。ある立場に立っていながら、それを隠蔽しようとするような輩に比べると、はるかに率直で好感を持てる。

彼は若いころ、信玄や信長はあまり好きでなく、「恰好よくてすがすがしく見えた」謙信の方につよく惹かれていた、という。こういう気持は信玄があくなき領土併合欲に燃え、手段を選ばず仮借ない武力を四方に向けて、権謀術数、敵を窮地に追い込み、勝利のことしか考えない人間だという、従来の史書の扱い方に影響されてのことであり、また、「表面的な、はなばなしい英雄論」からくる「たわいのない好き嫌いの印象」によって持たされたものであろうとする。彼は信玄を研究するうちに、信玄の人間的印象が少しずつ変わり、惹かれるようになった。信玄の人間統率力のすばらしさや、創意工夫の卓抜さ、さらには信玄の思想・哲学の深さなどを知ったからである。上野がその研究に当たって依拠したのは『甲陽軍鑑』であり、また武田氏関係の遺物や戦争遺跡を重視する方法をとった。そういうスタンスを選んだことで上野は、『甲陽軍鑑』の史料的価値や遺物の信ぴょう性に疑問を呈する歴史家たちに対し、「生きた人間を無視する古文書一辺倒の史学」と罵倒する。『甲陽軍鑑』でもっともいきいきした人物として描かれている山本勘介を無視したり軽視するような史学ではだめだという訳である。

そもそも「悪玉信玄」を言いふらしたのは、謙信や信長のような、信玄のライバルたちであり、彼らの宣伝文句を後世の御用学者が受け継ぎ、世に流布させたのだ、と上野は言う。彼らが材料としたのは、一に親である信虎を追放したこと、二に嫡男の義信を幽閉して死に追いやったこと、三は妹婿の頼重を謀殺した上その娘を妾にしたことで、人倫にもとるというふうに非難されている。これについて上野は、こういった考え方は論語的道德観に立っており、伝統的な君主国家論からする道德律が至上だ

という思想だと言うのである。信玄の理想とするのは舜の時代の古代中国であり、ここでは民に迎えられた君主が仁と義をもって民主主義の政治を行なうのであって、この王道主義は易姓革命を肯定すると上野は言う。こういう思想を実践したのが、領国統治における治水や立法であり、度量衡の制度や産業奨励などの民治だったとし、領民がいかに信玄を尊崇していたかは、信玄枹・信玄袋・信玄灸などの伝承を見ても明らかだというのである。

いわゆる信玄の三大悪行なるものにしても、それぞれ事情があって、信玄はあえてその道を選ばざるをえなかったのだと、上野は弁明する。信虎追放の件については、信虎の武断主義と晴信の理想主義の対立が根本だが、今川家の継嗣問題とのからみで、信虎が重臣たちを処断するという事情があり、これが重臣たちの信虎排撃という事態を生み出したと言う。義信問題については、「弁解の余地のない非人道的な大罪で、信玄の人生行路における一大汚点であったことは間違いない」としつつも、上野は、これはやむをえずしてやったことで、自ら進んで行なった行為ではない、とする。骨肉相食む闘争がくりかえされていた戦国では、親子兄弟でも倒すか倒されるかというきびしい状況に置かれていたのであり、駿河侵攻は信玄にとって不可避の道だったし、また武田の側では外様衆と譜代衆とのあいだの抗争が激化していて、義信の謀反が起きたのだと説明されている。

それでは本稿の主題とかかわる、諏訪侵攻問題について、上野はどんな説明をしているのであろうか。上野は、「まことに微妙で、かつ複雑」な話と言い、「この逸話は現代でも諏訪人にもっとも評判が悪く、その歴史の軌道をたどると、憎さ百倍の感情を交えて」、江戸時代からねじ曲げられた話にされてきたと言う。信玄の振舞いは「実に禽獣の行と言ふべし」と断罪した古書について、「痛ましい迷妄」・「すべてたわいのないアンチ信玄の感情」と罵っている。上野の言う真実では、第一に、最初に侵略戦争を仕かけたのは信玄でなく頼重の方であったと、例の「瀬沢合戦」をあげ、「諏訪頼重を仆さなければ、逆に信玄が仆されるという戦国の構図が赤裸々に現れた結果といえる」ということになる⁽⁷⁾。

頼重の娘を妾にしたことについては、『甲陽軍鑑』で山本勘助が進言したという、諏訪勢取り込みのはかりごととなる説を上野は斥け、そもそも信虎と頼重とのあいだで結ばれた協約の中に、頼重と弥々との結婚とパラレルに、晴信と頼重女との結婚が決められていたのだとする。晴信に攻略された諏訪一族は、諏訪神権社会を守ろうという意図から、武田家の親族に加えてもらいたいと思い、晴信に婚約の履行を迫ったと見るのが「常識」だ、と述べている。敵の娘は斬れという声がつよい中で、信玄は人間的で涙もろく、「自らすすんで業を背負って」、やがて大きな禍根となるような決断をしたことになっている。信玄の決断を支えたものとして、諏訪明神に対するひたむきな信仰があったとしている。

上野の説には無理がある。「机上の史学が無視する瀬沢合戦」と言うのだが、この合戦があったことを証明する史料がない以上、まともな歴史家はその存在を認めることができないのは当然である。第二の政略結婚説であるが、平和協定を平気で破り、嘘をついて頼重を殺した信玄が、政略結婚の履行を強制されるなどということはいえない。そんな律儀な人間ではない。平和協定は信虎が結んだものであり、信玄はそれに拘束されないので、諏訪へ侵攻したのである。そもそも信玄と頼重女とのあいだに婚約があったかどうかわからない⁽⁸⁾。諏訪衆がそれを望んだということもあやしい。頼重と祢々の間に寅王丸が生まれており、信玄はこの子を名義人に立てて高遠頼継を討っている。諏訪と武田とのかすがいというなら、すでにこの子がいたのだから、頼重女と晴信の結婚を諏訪勢が「強制」するわけがない。信玄には諏訪社への純真な信仰があったというのも、承服できない。信玄に信仰心があったとしても、彼は社寺を政治的・軍事的に利用したことで知られている⁽⁹⁾。戦勝祈願さえも、勝利と寄進とを引き換えにする功利的な態度を示している。

さすがの上野も強弁がいささかうしろめたかったのか、「甲府に頼重を呼び寄せて詰め腹を切らせたことが“騙し討ち”と受け取られ、信玄の侵略戦争の出発は、第三者から見ると、どうも暗く重苦しい、謀略の門出として人々の胸に焼き付けられてしまったようである」とか、「諏訪人たちの望んだ政略結婚であっても、後世の人々からみれば、それは理屈の通らない、非人道的な行為と映ってしまい、時が経つにしたがって、それは増幅せざるを得なかった」などと書かない訳にはいかなかった。それでもなおかつ、「熱心に道を求め、経綸と修養を積み、王道政治を模索するその姿は、すべてが国を思い、民を思う心に根ざしていたから、家臣や領民にとっては純粋で、頼もしく、かつ爽やかなものとして映った。諏訪御料人との結びつきも決して不純には感ぜられなかったのであろう」と、臆断するのである。これはもう、「わが仏尊し」の、理屈を超えた信仰告白である。もし彼の意見が事実であれば、どうして重臣たちの加担した義信謀反事件などが起きたのであろうか。政略結婚にはまだしも「戦国の論理」がある。加害者が被害者の娘を性的にまで征服することに、王道や人倫の片鱗もない。

山梨県出身の史家としては長老格というべき柴辻俊六氏は、「素朴実証主義」として批判されたと自ら言いながら、「事実の積み重ねの上に歴史は構築されていく」と反論し、「実態を客観的に明らかにすること」に主眼を置いている⁽¹⁰⁾。だから、『甲陽軍鑑』については、「客観的な事実として参考になる部分は少ない」と判断している。その著書においては、「信玄を英雄視する気は毛頭なく」、その強圧的な領土維持、権力者としての専制的な支配の実態を明らかにしようとしている。こういうスタンスでの研究であるから、その著述については信が置ける。ただし、論評や感想が欠けているので、著者の史論や史観を直接読むことができない。堅実ではあるが、ここ

ろに響くものがなく、本稿の問題意識からすれば、あまり参考にならないのである。

若手の研究者として実績をあげている平山優氏の場合は、格別の史観や方法論を持っているようにはみえないが、原史料や先行研究をきちんと踏まえて、着実な歴史記述を行なっている⁽¹¹⁾。信玄の伝記執筆に当たっては、既に汗牛充棟というべき先行著作がある中で、オリジナリティを出すべく苦闘し、とくに信玄を戦国史の中でどうとらえるかに迷い、苦悩したという。けっきょく、当時の社会の中で信玄を位置付け、その内政・軍制・家臣団編成に重点を置いて記述することにしたと言い、信玄という人物の評価についてはかなりの冒険をおかしたと述べている。「公儀」（足利幕府体制）よりも「天下」（統一権力・秩序）が優位だとした信長とちがって、信玄の方は室町幕府体制に連なろうとする自己認識を保持していたとする説は、上野氏の場合と逆になっているが、平山の信玄人物像は必ずしも鮮明なものではない。

諏訪関係についての平山の記述では、天文10年7月に上杉憲政が東信に侵入した際、頼重が同盟者の晴信や村上義清に通告することなく上杉と単独講和を結び、領土分割協定までしたことが、晴信の諏訪侵入の理由であった、と「推定」している。この見方は、信玄の諏訪侵略を正当化する根拠として、新田次郎にまで利用されたものだが、これには疑問がある。晴信・義清と共同作戦をとらなければ対抗できないほどの強敵である上杉勢に対して、抜け駆けができるほど諏訪勢は強大だったのであろうか。出兵の要請があっても、父信虎の追放事件であと始末に追われていた晴信は動けなかったのではないか。その年と前年、諏訪は大飢饉に苦しみ、5月には信虎や義清と共に佐久・小県に出兵したのだから、領内は疲弊しており、単独出撃の余裕などなかったはずである。この年も前年も甲州は歴史的大飢饉であったが、そういう状況のもとで信虎が東信への出兵を強行したことが、信虎追放の理由とされている。6月のクーデター直後の晴信がその轍を踏む訳がないだろう。中立的歴史学者である奥野高広は、「武田信玄と村上義清は、頼重を援けなかったので、頼重は憲政に和を求めている」と記述している⁽¹²⁾。孤立無援の状況の中で、頼重は戦火を交えることなく平和の道を求めざるをえなかったのである。

平山の著作によって知ることのできることに、信玄の領土統治が善政ばかりでなく、ときにきわめて過酷な領民収奪があった事実がある。父信虎の始めた棟別銭をより厳密・徹底化したのは徴税強化であるが、前倒し納入を命じた場合もあり、天文11年8月から棟別帳の作成を開始したところ、課役逃れをしようとする者が逐電・逃散する例が増え、信玄は郷村共同責任体制を押しつけた。信玄は天文年中、信濃進攻に必要な費用と軍兵調達のために、郡内の地下衆に三回にわたって過料銭を課し、負担に耐えかねて逃散するものが続出した。これが信玄仁政の真相である。信濃や諏訪できびしい検地をした実証はないが、信濃国衆に対して起請文の提出を要求し、その所領貫高を正直に申告するように命じている⁽¹³⁾。この貫高に応じて軍役の負担がこま

かく規定・強制されたのである。武田氏の直属家臣であれ、信濃衆であれ、所領の凶作のために所定の軍役が負担できず、軽減を申請するばあいや、軍役負担を嫌って陣中から逃亡し、流民化する被官が多かった。諏訪郡下桑原の10カ村民は、高鳥城の普請役や他郡への普請役を命ぜられ、それが免ぜられても諏訪社の鳥居の建設を、上代の古文の示す先規の分や、本帳に載っている古い郷党が不明になった分まで負担させられている⁽¹⁴⁾。久しく絶えていた神事・祭事を復活する費用を担わされたことは、信玄の善政とはたして言えるだろうか。

3. 民衆の歴史意識をめぐる諸問題

——信州における武田信玄の評価にかかわって——

本章では、本稿のメイン・テーマともいうべき問題の解明に取り組むことにする。結論を先に言えば、「信州人は信玄について好意的である」と判定することはできない。だれでも好き嫌いはあるのだから、評価がひとつにまとまるなどということはめったにない。筆者の知人のあいだでも、信玄に対する好悪・評価は分かれている。たとえば中学以来の友人 T は、「小学校の歴史で信玄について学んだとき、実に嫌な奴だと思った。しかし、その後いろいろ知ってその気持ちはだいぶ和らいだ」と述べた。また、これも市民学習会での知人である K は、「なぜと言われれば明確な理由は言えないが、信玄には好意を持っている」と語った。どっちにしても正確で豊かな知識の上になされた評価ではなく、単に好き嫌の次元であるから、あまり意味のある意見ではない。それでは、諏訪人・信州人はこの問題についてどういう態度をとっているのだろうか。

(1) 観光資源としての歴史の経済的利用

このたびの「風林火山」ブームを見ていると、NHK ドラマを観光に利用しようとする観光業界と、それを支援しようとする地方自治体のうごきが目立っている。観光業者と地方行政当局は、NHK が当地を選んできたことに歓喜し、この機会に当地を大いに売り出そうと動き出した。このドラマは、宣伝効果ということでは数億円、いや数十億円に相当するという訳である。とくに信州ではこのところスキー客をはじめとして観光客が減少傾向にあるので、県内各地のホテル・旅館など青息吐息の実情である。従来どこでも NHK ドラマのご当地は観光客を増やしてきたので、信州もそれにあやかれるということから、観光業界が欣喜雀躍したことは当然である。そして業界の振否が税収の額に直結する地方自治体が、利益共同体として宣伝に力を入れたことも道理である。かくしてわが郷土諏訪は「風林火山」一色になった。

駅や商店街に「風林火山」の青色旗が林立した。武田氏が滅亡したのち、織田の支

配のあとの豊臣の武将で諏訪を領有した日根野が慶長3（1598）年に築いた「高島城」周辺にも、多数の観光旗が立てられた。頼重統治の時代に存在した「高島城」というのは、日根野高吉の高島城とはまったく別で、湖畔から離れた丘陵の上に位置し、その遺構は現在まったくない。しかも現存の高島城の天守閣というのは、明治維新の際の破却の跡が草地になっていたところに、第二次大戦後の経済復興期に造られたコンクリート城であり、まさに観光客目当ての建築物である。国宝松本城と比べると規模も質もまるで落ちており、展示物もろくなものがないのだから、少額とはいえ入場料を取るのには気恥ずかしいような施設である⁽¹⁵⁾。「由布姫」がそこに住んだと井上靖が虚構した小坂観音院にも、もちろん「由布姫の里」なる旗が立て並べられた⁽¹⁶⁾。高遠や小笠原と結んで武田統治に反逆し、武田軍やその配下になった諏訪勢に圧殺された西方衆の土地である小坂に、「由布姫」が、しかも勝頼と共に住んだなどということはありえない。井上靖は歴史や地理の研究などろくにしないで戦国ロマンをでっちあげた訳だが、史実をまったく知らないはずのない「地元」までフィクションに便乗するのはいかがなものであろうか。

観光業者なら史実を無視しても仕方ないであろう。しかし博物館であればそうはいかない。諏訪郡内のある博物館は、「諏訪法性の兜」なるものを、「風林火山」記念展示の目玉として飾った⁽¹⁷⁾。諏訪神社の神長官守屋家から出たものとされるが、兜の鉢は中世の作だけれども、他の部分は後世の作である旨専門家によって鑑定されたというコメントがさすがに付されている。この博物館では、手柄を立てた将士に与えた信玄の感状をいくつか展示したが、その多くは偽書と考えられるにもかかわらず、こうした偽書がたくさん作られたということを示すためにあえて展示したのだと館長が説明した。実はこの館を訪れて偽書の展示を見た人から抗議の電話がかかってきたことがあるので、偽書を展示する趣旨を説明するのだと館長は弁明した。しかし、後世なぜそのように偽書が多数作られたかについての説明はなされなかった。

諏訪郡市の諸博物館が連合で開催した「風林火山」シンポジウムの開会のあいさつをした教育長は、「ドラマの方ではいろいろおもしろい話が展開されていますが、本日は歴史的真相がどうだったかについて学べると存じます」という意味のことを言った。教育行政の責任者として、ドラマと歴史の区別をわきまえているのはよいことだ。当日の講師は、各博物館の学芸員や萩原三雄氏のような専門家だったから、退くつになるくらい律儀に歴史的真相を伝えた。こういう歴史研究者からすれば、ドラマがいかに史実から離れているかが、当然大変気になるらしい。ドラマの歴史考証を担当している老碩学は、「いろいろ問題になる点是指摘しているのですが、その採否はけっきょくディレクターの権限でして」と講演の中で語った。不満を洩らしているようでもあり、弁解しているようでもあった。歴史考証担当者としてアカデミックな研究者の名前が掲げられていれば、視聴者はドラマの中身を歴史的真相だと思うだろ

う。ドラマとはフィクションだと当たり前のことも知らぬ視聴者が愚かだということであろうが、誤認や妄想を抱かせるための意図的な装置の感がなきにしもあらずである。

筆者が山梨県に在勤していたころ、石和を訪れたことがあり、そのときにもらった観光パンフレットを今だに保存している。発行年が記入されていないので、いつごろのものか確定できないのだが、その表紙には「川中島合戦戦国絵巻」と題して、信玄と謙信の一騎打ちの写真が掲げられている。信玄の背後と側面に武田二十四将とおぼしき武者が並んでおり、その多くが抜刀して氣勢をあげているが、中には笑顔の者もいて緊迫感はない。パンフレットの中を見ると、春に行なわれる「石和温泉桃の花まつり」の一環として、武田・上杉両軍による「壮大なスペクタクル」が笛吹川の河原で展開されるとある。川中島の戦を石和でやっても仕方あるまいとも思うのだが、派手なチャンバラごっこが観光客を誘致するというのであれば、それにも意味があるのだろう。ただ、パンフレットがこの合戦ごっこについて、「史実に基づいて再現した」と書いているのはひっかかる。「川中島合戦図錦絵」にもとづいて武具をデザインしたとか、せいぜい『甲陽軍鑑』に拠ってシナリオを作ったとかいう程度の話であろう。川中島合戦の真偽について専門家のあいだには諸説があり、史実はまだ確定していないと承知している。

歴史と観光ということについて、「風林火山」フィーバーにかかわるエピソードをひとつ紹介することにしよう。頼重の居城であったが、信玄に攻められて守備兵もなく、頼重はいちはやく見捨てた上原城が、ドラマの進行と共ににわかに脚光を浴びた。諏訪人の中にも、「ここでそんなことがあったとはまったく知らなかった」とか、「はじめて城址に登ってみたが、大変感慨深かった」などと言う人びとが現われた。さきにちょっとふれた、筆者の中学時代の旧友のTも、日ごろ鍛えている健脚で、さっそくそこを訪れた。さて、この城の所在地の市の観光連盟か何かが、参観者のために記念スタンプを作って設置するという新聞報道があった由で、筆者の友人、前出のYがさっそくこれを問題にした。「どこの世界に敗戦記念スタンプを作るところがあるか」と。なるほど戦勝記念の凱旋門や石碑はあっても、敗戦や落城の記念碑はあまり聞いたことがない。「戦没者慰霊碑」や「平和の塔」といった、ソフィスティケートされたモニュメントはあるようだが、Yは観光連盟に対する指導責任があるからと、市の観光行政当局にげんじゅうに抗議したと、余憤収まりかねる面持ちで筆者に語った。ただ、Yのこういう態度は諏訪人に共通している訳ではない。上原城を訪れた筆者の友人Tは、そこで土地の故老にたまたま会って会話したが、「信玄公は大変りっぱな方で、彼の治世中この土地は平和だった」と、その老人は信玄の賛美をした由である。

NHKドラマがいかに史実と遊離し、勝手にフィクションをつくりあげていよう

と、それが地域の人びとに土地の歴史についての関心を生みだし、来訪する観光客を増やすという効能があるのであれば、それはそれでよいではないかという意見がある。それは多数意見かもしれない。筆者が本年七月に「風林火山」関係の講演をしたときにも、そうした意見を抗議に近いかたちで述べた参会者がいた。この女性は、夫と共に長年社会党を支援する活動を行ってきた、かなり原理主義的の社会主義者である。NHK や観光業者の史実軽視に批判的かと思えば、意外に現実主義的なのである。ただ、筆者の報告が「真実を無視してただ表面的なおもしろさに酔うのは浅薄ということにならないか」というものだったのは、学者ぶり、知識人ぶって大衆を愚民扱いにするものではないかと、反感を抱いたふしがある。筆者が数年前、養老孟司の『バカの壁』について紹介し、コメントする講演を行なった際にも、彼女は似たような反応をしたので、上記のような推測ができるのである。筆者の表現力の拙さは自覚しているが、「風林火山」の件について筆者は、NHK の権威、行政の権力、業者の欲望に迎合しないスタンスなのだから、これでも民衆の味方だと自認しているのである。民衆の歴史意識の目覚めこそが、筆者の熱い願いである。

「観光と歴史」というテーマを考えると、大変示唆的な事例だと思うので、「風林火山」の北信の舞台にある観光展望台、大峰城のことにふれておきたい。それはもともと長野市北方の大峰山山頂(828メートル)に上杉方が築いた山城で、西に葛山城、東に横山城があって、裾花川を隔てた武田方の旭山城と対峙していた。葛山城主落合備中守の家臣大峰藏人の居城だったといわれる。上杉と武田との間の何回かの戦のあと、善光寺平も大峰城も武田方の手に落ちた。当時も小さな山城であったが、昭和30年代には山頂にそれぞれ20メートル四方の本丸・二の丸・三の丸の跡と曲輪の跡、土壘、石垣などが残っていた。1954(昭和29)年に長野市長になった倉島至は、二期目の59(昭和34)年5月、かねて観光開発を志していた大峰山にはじめて登頂し、この松の木の茂る国有林を観光地として開発しようと考え、遊歩道の整備、ロープウェイと展望台の設置、ハケ所の遊園地を内容とする「大峰山自然公園案」を市議会に提出し、全会一致の賛成を得た。のちに市長は山頂まで自動車道路を通すべく、工事を自衛隊に依頼することや、善光寺と提携して山頂に仏舎利塔を作ることなどを構想した⁽¹⁸⁾。

仏舎利塔はいろいろな障害のために実現しなかったが、自動車道の方は自衛隊の協力で60年9月に第一期工事が竣工した。このかん自衛隊が山頂工事中に石臼などの出土品を発見し、県文化財専門委員の調査によって山城の遺構であることが確認された。倉島市長は山頂施設として大峰城を復元することを計画し、史跡調査委員会を組織して自ら会長となり、委員の多くは史実どおりの砦を復元する意向であったのに、市長の意を受けた副委員長(県文化財専門委員)が、福井県丸岡城を範とする城型展望台を作るということで委員の意見を取りまとめた。大峰城は62(昭和37)年11月に竣

工したが、工事費は計4728万9千円で、自治省が認めた起債額は4500万円であった。備品費や事務費を加えると総計4979万6千円になった。その他、第一期道路工事に市は265万円を支出し、『大峰山城史』の出版、小田原城・犬山城・金華山城・丸岡城・姫路城の視察、自衛隊・自治省・地方財政委員・関東財務局・総理府等々への陳情や接待に要した費用も相当な額にのぼったはずである。

起債案は市議会で満場一致可決されたものの、審議過程で二人の議員が強烈に反対し、「そんな金があったら学校や道路にまわせ」と主張した。市側の説明はこれが観光起債で他の用途に振り向けることができないというものであり、倉島もまた市広報で三回にわたり、この起債は一般の市費を圧迫するものではないと説明しているが、起債は償還しなければならないので、倉島は大峰城の入館料でまかなうことを考えていた。しかし、入場料はごく少額だったうえ、12月～3月は冬季休館になった。長野駅から大峰城に直通だったバスも、乗客減で廃止されてしまった。大峰山のすぐ東側にある地附山（720メートル）を開発するために民間資本の「長野国際観光」株式会社が設立され、ロープウェイや遊園地を設置しつつあったのと並行して、大峰山の開発が市の首導によって進められたのだが、この二つの山をワンセットで開発することを奨めたのは、自治省の係官であった。長野市は観光都市として発展すべきであるが、善光寺だけでは物足りないのので、北部山地の観光開発は時宜を得ているし、大峰城築城は「はなはだ宜しい」と言って起債を承認したのである。

大峰城と一体だったはずの地附山遊園地は経営に失敗し、長野国際観光は解散してしまった。地附山・大峰山の背後に県企業局が有料観光道路（バードライン）を作り、観光客を飯綱・戸隠方面に奪われてしまったことが地附山観光敗退の最大理由のようだが、片肺をもがれて大峰山観光も打撃を受けた。大峰城は4階建20メートルのコンクリート製で、その1～3階に蝶・カブトムシの標本などを展示しているが、歴史資料は貧弱で歴史博物館の性格はない。倉島は三期目の市長選に出馬したが、大峰城は無駄遣いだと反対派に攻撃され、敗れた。彼は社会党員であったが、議会与党の社会党は、倉島が道路建設のために自衛隊に接近したことが不満だったらしく、彼に向けられた無駄遣い攻撃にほとんど反撃することがなかったという。当時は革新市長といえども開発と箱物づくりに狂奔したのである。せっかくの史跡も観光資源としてしか取り扱われなかった。経済的な利益をもたらさない施設は、価値ゼロとなる。こんにち、歴史の持つ意味を問うことなく、ひたすら観光のために利用しようとする業者や行政は、そのあさましさの報いを受けるであろう。歴史講演に招かれて来諏した山梨からの講師に、諏訪の当局者は「諏訪の方が山梨よりずっともりあがっている。なにしろ風林火山の旗の数がちがう」と誇ったという。宣伝旗と観光客の数を競うような程度の知性しかない同郷人を、筆者は嘆き、恥じる。なにしろ、諏訪はその旗の下に蹂躪されたばかりか、諏訪人同士が「犬のように闘はせられ」（栗岩英治）たことを末

裔たちはまったく気にとめもせず、ひたすら金儲けに狂奔しているのである。

(2) 諏訪における郷土史家たちの意見

牛山秀樹『諏訪史概説』上 (1948年)

これは、戦後はじめて刊行された諏訪の通史で、著者は筆者が中学時代に郷土史を教わった先生である⁽¹⁹⁾。この本は小・中学の教員が社会科を教える際の参考書として利用すべく作られたものである。著者は執筆に当たって格別の抱負や主張を提示していないが、「公平な歴史学上から批判して、兎もすれば陥り易い御国自慢や、不当に高い評価をすることを避けた」という。この立場からの頼重評は、「頼重は一個の武人としては誠に人格も高潔であり、武士道的にも典型的の武人であった。この点から彼が受けた好感は一種の傑出した大名の如くにも説かれて来たが、この頼重に対する見方は訂正されてもよいようだ。それは陥落に当たっての活躍が極めて不手際を示しているところに人物の眞価が曝露されている。即ち諏訪一国の棟梁として、内は諸族を統率し、外は四隣の侮を防ぐに貫禄の足らなかったため、終に父祖伝来の地位を失い、敵の城下で自刃と云う最後を遂げるに至った」ということになる。片や信玄評は、以下のごとく手放しの絶賛である。「ともあれ、頼重は一代の英傑武田信玄その人に対しては、余りにも人物の相違に大きすぎるものがあった。かつて梟雄父信虎が如何ともすることのできなかった諏訪郡を僅に旬日の間に占領された。信玄が後年海道随一の弓取りになったのも故あるかなと思わしめる。出陣に先だって高遠や下宮を手中に入れた外交戦略、戦争に当たっては第五部隊の活躍による諏訪勢の攪乱等から攻撃作戦が如何にも電撃的であったことなど一分の間隙さえない見事のものであった。」執筆に当たって、「著書の一家言にわたるようなことはなるべく避けた」というのに、これはまた実証主義史家の埒を越えた人物評である。しかもその価値基準を現代でなく戦国時代に求めている。太平洋戦争を体験したあとだというのに、この著者の歴史意識は戦前と変わっていないのである。

諏訪教育会『諏訪の歴史』(1955年)

これは諏訪郡史編纂委員であり、「諏訪叢書」の執筆委員だった今井広亀による通史である⁽²⁰⁾。「三、中世の諏訪」の「第五章 武田氏と諏訪」は、信玄の諏訪攻略について淡々と物語ふう に記述している。評価にかかわる部分は、頼重自刃の箇所で、「豪胆な頼重は……辞世一首をのこして見事に割腹した」というのと、次のような頼重人物評がある。

「頼重は二十二歳で二度筑摩郡に兵を出し、二十四歳で祖父のあとをつぎ、二十五、二十六歳と二度北信に打って出て、長窪・芦田まで占領するという大活躍をしたのであるが、祖父のような深謀遠慮もなく、彼を助けるよい老臣も持たず、若い元気にまかせていたので郡民はいつも不安にばかり思っていた。それに諏訪は上地

が狭く、凶年のあとの軍事ではすぐに疲弊してしまって、甲州などのように広い平野を持って物資の豊かな武田氏には対抗できる筈もなかった。まして信玄のような世に稀な政治家・軍略家が出たのであるから無理もなかった。」

このあと今井は、武田氏の諏訪統治下、上原に城下町が栄えていたこと、信玄が諏訪神社を深く尊崇し、祭事の再興をしたこと、仏教の信仰も篤く、下諏訪の慈雲寺の住職が伯父だったので、その伽藍を中興したことなどを詳細に記述し、つぎのような信玄評を行なっている。

「戦国時代の名将は何れも民政に心をくだかないものはなかったが、特に信玄は善政をほどこし、人民みなその徳になつたといわれている。今日特にその方面の史料は見られないが、四十年もの間その政治を受けながら悪い口碑の一つものこっていないのは、その政治に無理のなかった何よりの証拠といつていいであろう。」

頼重評にせよ信玄評にせよ、確たる資料にもとづいて行なわれたものでなく、今井の主観にすぎない。口碑については、のちにふれるが今井の誤りである。しかし、彼の『諏訪史』ははじめて刊行されたコンパクトな通史であり、諏訪教育会という発行元の権威もあって、教員を中心に広く普及し、武田の善政、武田に対する諏訪人の好感という見方を定着させることに貢献した⁽²¹⁾。今井の史観は、戦国の「名将」を英雄として尊崇する戦前の常識に立っており、信玄の諏訪明神信仰についての理解もすこぶる浅薄である。郷土史研究の先駆者のひとりとしての今井の功績は評価されるべきだが、頼重・信玄論については問題が多い。

細川隼人『武田信玄と諏訪』（1975年）

著者、細川は小学校教員のかたわら郷土史研究に努め、諏訪史談会（諏訪教育会内）の指導的人物のひとりであり、この本は彼が89歳のとき執筆したもので、五十年余りの研究をまとめたものである⁽²²⁾。彼は幼時に母親から、信州の殿様たちが信玄と戦って敗北したといわれる「瀬沢戦争」にまつわる昔話を聞き、「信玄は強いなあと思うとともに、わたくしにとって理想の英雄となった」と自記するように、根っからの信玄崇拝者だったが、この著作ではきわめてクールに客観的記述を行なっている⁽²³⁾。本の中で、塩尻峠の戦争を例に史料批判の厳密なるべきことを説いた今井登志記の文章やこの戦争関連の史料が引かれているように、細川のスタンスは実証主義であった⁽²⁴⁾。合戦の経過などが詳細に書かれた物語調の歴史である。

細川は頼重の死については、「頼重はこれ以上諏訪の領主としての恥かしめを受けるより武人としていさぎよく最後をとげたいと決意して、……立派に自害して果てたのである」と同情的な表現をしている。しかし、頼重の心境など伝えた史料はないはずで、細川の想像である。また、「……頼満の血すじを受けて才気に恵まれ」といった人物評もあるが、これも史料に裏づけられない記述である。信玄については、「征服された諏訪地方の人々に今でも信玄様、信玄公と親しまれている」とか、「信玄は

たしかに戦国時代の英雄であり、病魔に倒れなければ京都へ上り、天下に号令し、戦国統一の覇業を成し遂げた第一人者だったかも知れない」など書いている。

しかし、注目すべきは板垣信方（諏訪郡代）の諏訪統治について書いたくだりで、「先任の信方から後任の信里在任中までをみても、諏訪は必ずしも平静ではなく、その統治にはかなりの暴政、苛斂誅求もあったと思われる」という記述があることである⁽²⁵⁾。その資料的裏付としてあげられているのには、永禄8年12月5日の「諏訪上官祭祀再興次第」に、「夫此板垣駿河守郡司御忼僭上」という記事があることや、『小平物語』に、「小平道三財宝を武田殿御取上之事」とあることである。また、天文15（1546）年8月、頼重の叔父で兄満隣と共に武田氏に属していた満隆が武田に対して反乱し、失敗して自害に追い込まれたことも、武田の統治がすべてうまく行っていたのではないことの例証とされている。しかし、諏訪武士団は「諏訪五拾騎衆」・「千野同心衆」・「高嶋十人衆」などに編成され、武田軍の先兵として従軍しており、所領安堵されていたことは、細川が書いているとおりである。諏訪の武士たちは基本的には武田に従属していたのだが、天文17年7月の塩尻峠の戦の際の西方衆のように武田に叛旗をひるがえすものもあり、武田方は自分に忠節を示す武士たちには所領・感状などを与えて巧みに利用したのである。

竹内丈夫『竹内丈夫先生遺稿集』

竹内丈夫（1901～96）は、旧諏訪郡豊平村に生まれ、千葉医専卒業後医師となり、1933年茅野市塚原に内科医院を開業、仁医として住民から敬愛された。郷土史研究家として多くのレポートを書いた。そのひとつ、「武田氏治下の諏訪」では、「諏訪は天文年中信玄公のために領主諏訪氏を失った。……古代中世以来の領主を失った諏訪の住民にとって、それは大変な出来事であったに相違ない。にもかかわらず武田氏に対する報復抵抗の史実の殆ど見られなかったのは何故か。小平物語という文献に、小平道三なる者が諏訪山浦地方の小豪族として僅かに信玄公に抗戦したことを伝えているが、それとても全く螻蛄の斧に過ぎず、武田氏治下となればそれに従っていたこと勿論で、この他に信玄公に抗した史実は全く見る事が出来ない。信玄公の住民統治の実力を知ることが出来よう」と述べている⁽²⁶⁾。小平道三以外に反抗者がなかったというのは、前節の細川の歴史記述に徴しても誤りであるが、上記のように書いた竹内は、後代の郷土史家あるいは諏訪人一般に向けて、つぎのような「提言」を行なった⁽²⁷⁾。

「武田信玄について諏訪人の批判が不十分と思う。

- ① 初陣である平賀源信奇襲の卑劣な方法。
- ② 諏訪攻略に際し高遠頼継の扱。諏訪頼重の誘殺。
- ③ 塩尻峠の合戦に三村氏に対応。
- ④ 対女性妾、人道無視。」

竹内の信玄批判は、道徳的基準からのものである。これは史実の正確な認識の上に人物の評価をする際の基準であるから、別に歴史研究の際に予断をもって史実を歪曲するような教訓史の轍をふむものではない。歴史研究における問題意識・観点として提示している訳である。竹内は郷土史研究の過程で、茅野市内外の苗字の由来を調べたことがあるが、室町末期から江戸初期にかけて甲州から諏訪に移住した例がきわめて多いことに気づいた⁽²⁸⁾。彼は武田治下において意図的に移住政策がとられたと推定している。竹内家自身、信虎・信玄に出仕していたという伝承を持ち、また竹内姓は甲州からの移民だと竹内は考えている。「武田氏の諏訪支配が終っても、江戸時代から今日まで甲州系住民は諏訪人と融和し、自分の祖先の出自も知らない程になった」とする竹内だが、信玄に対する評価では前掲のようにきわめてきびしい態度であった。

(3) 作家による信玄の評価

新田次郎は諏訪人の中ではもっとも熱心な信玄びいき派ではあるが、彼の意見は偏倚しており、諏訪人の考えを代表するものではない。もともと人物に対する好悪などというものは感情的な要素が多く、理由を問い詰められると困るようなものだが、歴史家や作家ともなると、そうも言っていられない。新田は「謙信と信玄」と題する、海音寺潮五郎との対談の中で、信玄びいきの根拠について、つぎのように話している⁽²⁹⁾。①自分は物事をすべて合理的にやる人が好きであり、信玄は感情的でなく合理的に行動した人である。②信玄は53歳の若さで業半ばにして倒れた悲劇の人であり、執念の散りぎわが哀れである。新田は以上二点のほかに信玄評として、①(肖像画からみると)一時はかなり余裕がよかったろうし、目が丸くて子どものころはかわいい顔をしていたのではないかと。②力攻めで勝つより、金山開発で得た金を調略に使った経済観念が新しい。——という意見を述べている。新田はNHKでの三国治郎との対談でも、信玄の調略は血を流さない話し合いの解決策だと評価し、治水による農政、金山の開発、能力のある人間を取り立てて強い家臣団をつくったことなどをあげている⁽³⁰⁾。信玄の政治家としての力量を称賛し、「信玄は信濃を侵略したが、侵略後の政治が上手かったから、信濃の人は信玄に従ったと云われています。その点、信玄という人はなかなかの人物だったのですね」という話になっている。

謙信派の海音寺は、謙信が戦争したのは領土欲のためではなく、乱れ切った世に秩序を回復したいという正義の念からであり、正しい道理のある側に合力するという信念をつらぬいた、さわやかで道義的にも清潔な人物だったことをあげて、「謙信という人に惚れた」理由にしている。これに反して信玄は物欲旺盛で、女色・男色にはげしく、とくに自分の妹婿である頼重を攻め殺し、義理の関係とはいえ姪である諏訪御前を側室にしたのは、「不倫で、いやらしいことに思われます」ときびしく批判する。

これに対する新田の反論はない。彼は倫理性よりも合理性を尊重するのだから、反論のしようもないだろう。しかも、彼の合理性というのは手段の合理性であり、信濃侵略が天下制覇のための経済的・軍事的条件として不可欠だったことはる説明するが、天下制覇という目的の合理性については何も言えない⁽³¹⁾。もっとも、かつてこの問題について踏み込んだ渡辺世祐は、信玄を「当時天下第一の政治家であり、軍略家」であったと認めたが、その政治思想の高邁については論証できず、信玄の修養がいかに深かったかを指摘するにとどまった⁽³²⁾。それを乗り越えようとした上野晴朗氏は、信玄の政治理念として「王道思想」を措定したが、その根拠は分国法と『甲陽軍鑑』である⁽³³⁾。信玄が孫子的霸道によって理想とする王道を実現しようとしたのだという上野氏の所説については、当然史家による批判がありうるし、これは論争の主題である。ここではそれに深入りせず、北信松代の郷土史家が、この地方では信玄を悪く言う人はあまりいないものの、謙信の人気の方が圧倒的に高いと述べていることを紹介しよう⁽³⁴⁾。信玄に対する信州人の評価は、北低南高だとよくいわれるが、信玄旗下の謀将として信任された真田家の領地であり、信玄支配下にあった善光寺平においてさえ、謙信の声望は信玄を圧しているのである。

(4) 藤森栄一の史論

藤森栄一は上諏訪の生まれ(1911年)で、諏訪中学では新田次郎の一年上級であり、共に地理学の三沢勝衛に師事して、考古学に関心を持った。中学卒業後書店だった家業を手つだったり、大阪に出て会社員になったりしたが、戦後になって考古学研究に打ち込み、在野の研究者として業績をあげ、多くの弟子を育てた。彼が参加した霧が峰高原保護の市民運動のてんまつは、新田次郎の『霧の子孫たち』に活写されている。しかし、この同窓・同門の二人の信玄観は、大きく相違している。藤森は中世の諏訪について書いた文章で、武田の諏訪攻撃を物語ふうスケッチしているが、信玄が高遠氏などを抱きこんだことについて、「晴信の狡猾な策謀」と書き、川中島の戦前後については、「信州はほとんど信玄の掌中であつたが、嚴重な徴兵や物資の徴発のためには若干の抵抗もあつた。そういうとき、信玄は即日攻めおとして、城兵をことごとく殺してまわつた。」と述べている⁽³⁵⁾。彼は信州の諸将が好むと好まないにかかわりなく、戦地に赴かされたが、さしたる高名も討死も伝えられていないので、要領よく辻つまを合わせていただけたらと推測する⁽³⁶⁾。

「信玄という中世風英雄の悪業」と書いた藤森は、頼重については美化している。「白哲長身、胸板あくまで広く、あっぱれな若大将」と想像をたくましくし、信玄の来攻に対して義兄弟の愛情を信じていたのは、中世を超え出た近世的ヒューマニズムだとほめたたえる。「父子と兄弟も、いかにだますか、勝つものが正義でだまされて滅びるものは愚者」だとする中世のモラルのもとで、頼重は「近代的愛情とモラル」

を信ずる「近世的ヒューマニスト」だというのである。頼重の辞世の歌には、「かれが近世を夢みた愛と人を信じる人間のヒューマニズムが燃えるように歌われて」と言い、信玄に比べれば中世人としてははるかに劣っていた頼重こそは、「実は暗い中世から明るい近世を開く捨て石になった人として、その死の歴史的使命をかってやりたい」とまで心情を吐露しているのである⁽³⁷⁾。これは、上野晴朗氏とは対極的ながら同型な「わが仏尊し」の史論であるが、新田次郎と共に三沢先生の科学性・合理的精神を継承したはずの藤森栄一にして、なおかつこのような信州人的・諏訪人的情念を表白する。「ひいきのひき倒し」に近い意見であろうが、少なくとも新田次郎が諏訪人の信玄観の代表者ではないことを例証している。

(5) 信玄・武田統治についての諸評価

長野県人の見方

『長野県の歴史』では、「甲越合戦の舞台」という章で信玄の信濃進攻と信濃支配がかなり詳細に記述されている⁽³⁸⁾。この本はこの経過を具体的に描き出すことで、手堅くもあり、ふるいアカデミズムの手法に従う、しっかりした史書であるが、著者の問題関心や批判意識にふれることができない。評価らしい記述はまったく欠けているので、筆者のテーマからすれば参考にはならない。

これと対照的に、小林計一郎の『武田軍記』は表題そのものからして物語調であるが、好んで論評を行っており、頼重に対する評価は手きびしい⁽³⁹⁾。「頼重は若くして家を嗣いだが、戦国武将としての素質に欠けるところがあったらしい。」「頼重は、義兄の信玄がオレを攻める筈はないと考えていたのであろう。まして一族の高遠頼継が反旗をひるがえそうとは夢想だにしていなかった。戦国武将としては不覚というほかはない。」「それにしても隣国が大軍を動員しているのに気づかなかった諏訪氏は、何といってもうかつであった。」といった調子である。夜襲すべきだという意見があったのに、頼重は決断力がなくて実行できず、「諏訪氏がこのようにもろく武田氏の前に潰え去ったのは、頼重その人の力量が信玄に劣っていたからと考えざるを得ない。いや、信玄の力量が大きすぎたのかもしれない。」と論じている。戦う前に高遠氏や彌宜満清、下社社人などを「ひそかに手なずけ」、進撃は迅速果敢、しかも力攻せず、和睦をもって敵をあざむき、ほとんど兵を損せず名門諏訪氏を亡ぼした「その手口は、心憎いばかり」であり、「謀将の天才的手腕」はすでに諏訪攻めで十分発揮されたとして、「この時、信玄はわずか二十二歳、正に乱世の英雄というべきであろう」と賛嘆している。戦国時代という状況の中では英雄なのであろうが、現代に生きる者の歴史記述・評価として、小林の著書には問題がある⁽⁴⁰⁾。

『善光寺物語』

この本の「六、戦国の世、各地を流転した善光寺如来」の記述によれば、弘治元

(1555) 年、善光寺の本尊をはじめ寺中の仏はことごとく佐久郡祢津村に移された⁽⁴¹⁾。如来はここに4年いたのち、永禄元(1558)年9月、甲州上条村の日輪法成寺に移され、翌年2月板垣の仮殿へ、さらに永禄8(1565)年に建造された如来堂に鎮座した。ところが、武田滅亡後、織田信長がこれを岐阜に移し、本能寺の変のあと織田信秀が清須の甚目寺に移し、さらに家康が浜松の鴨江寺に迎えたが、わずか5ヶ月で家康は甲府善光寺に戻した。ところが慶長2(1597)年6月、豊臣秀吉が京都方広寺大仏殿に如来を迎え、翌年に信濃善光寺へ帰した。同寺に如来像が不在だったのは44年間に及んだが、この本の著者は、武田・織田・豊臣など「自己の都合のよいように如来を利用しようとした者の末路がみな良くなかったことを世人は感じ」た、と書いている。川中島の戦いを避け、如来を安全にすることが遷座の大義名分であったが、現代における善光寺の立場からは、如来を流転させた輩に対して仏罰がおりたと言うのである。

(6) 口碑・伝説にみる武田氏の進攻

口碑・伝説の中に武田非難のものはひとつもないなどというのは誤りである。南佐久郡海ノ口城は天文5(1536)年の暮、武田軍の攻撃で落城したが、城将平賀源心に従っていた井出一族も討死したので、海ノ口海尻や小海町稲子の人びとは今だに正月に門口に松を立てず、餅もつかないという⁽⁴²⁾。これは武田軍に討たれた先祖のことを偲ぶが故である。

南佐久郡松原の「野ざらしの鐘」というのは、川中島合戦の際信玄が北佐久郡の高瀬村にあった新善光寺の梵鐘を掠奪して甲州まで運ぼうとしたが、海尻で動かなくなり、信玄が梅原の諏訪社に寄進したものだという⁽⁴³⁾。この鐘を屋根の下に置くと必ず火災が起きるので、境内に放りっぱなしになっている。武田軍の掠奪の話はそう多くある訳ではないが、寺の焼き討ちの話は数多い⁽⁴⁴⁾。平賀源心の菩提寺東明禅寺、武田軍の伊那進攻では長久寺(辰野町)・中仙寺(伊那市)・耕西寺(豊丘村)・泉龍院(同)・文永寺(飯田市)・玉川寺(同・下久堅)、佐久地方では八幡神社(白田町)・神原山最明院(白田町)・長命寺(佐久市)・安養寺(同)・守芳院(同)・福王寺(同)・正眼院(小諸市)・釈尊寺(同)・長泉寺(同)・耳取神社(同)・神宮寺(軽井沢町)等、貴重な文化財が焼失した。諏訪の上原の城下町には多くの社寺があったが、武田軍の上原城攻めの際、武田軍によって焼き払われた。略奪も行なわれ、耕西寺からは梵鐘、八幡神社からは鰐口が持ち出されて、武田軍に味方した社寺に移された。

諏訪における信玄伝説の中に、金沢金山(茅野市)の「銀の杖」というのがあり、武田軍が開発した金山に村人が鉋夫として徴発され、酷使されて死人が出るので村人が嘆いていると、村に來た蓮源坊という京都の僧が鉋山に行き、武士たちに止めるよう申し入れたが一蹴され、殺されようとしたとき、僧がお経を唱えて祈ると、杖は銀

に変わり、電光・雷鳴の中で鉾山は崩壊し、村人たちは苦役から解放されたというのが話のすじである⁽⁴⁵⁾。僧は仏になったということになっている。また、茅野市豊平の伝説では、信玄が川中島の戦いからの帰途、この村の大泉寺に多くの宝物があることを知り、これをわが物にしようとして、甲州に立派な寺を造営してやるからと住職をだまし、寺を甲州に移してしまったという⁽⁴⁶⁾。大正初年に村の小学校の郷土史に詳しい先生が話したのだが、その後生徒たちが修学旅行に行ったら、大泉寺という寺がたしかに甲州にあったというオチがついている⁽⁴⁷⁾。

4 おわりに

NHK 大河ドラマにかかわる民衆の歴史意識というテーマでは、筆者が直接見聞いた範囲はご当地諏訪に限られ、また民衆といっても筆者の知人や講演会に参加した人たちにしか接点はない。意識調査をした訳でもないので、明確な結論を提示することができない。ただ、ご当地だけに、ここの住民がドラマに寄せる関心はきわめて高く、テレビドラマの視聴をつうじて住民の歴史意識がかたちづくられたり、変容したりすることは確かである。戦国史や戦国武将は民衆の興味をひきつける題材のようにみえる。新田次郎は、「やはり歴史小説は戦国時代が一番おもしろいですね」と言い、海音寺潮五郎は武田・上杉について、「いろいろな点で対蹠的な二人が、時代を同じくし、しかも隣り合わせていて、雌雄をきそったというのは、日本歴史上の大ロマン、大偉観ですよ」と語っている⁽⁴⁸⁾。新田や海音寺のような歴史観を形成することに影響したのは、戦前の歴史教育ではないかと思われる。実は筆者もまた戦前の小学校で「国史教育」を受けた経験があり、「ヤア、ヤア、ワレコソハ……」などと名のりをあげてチャンバラごっこをしたおぼえがある。

明治からこの方、小学校の歴史教育はチャンバラ史観が支配してきた。そのことは国定教科書を繙いてみれば明らかで、『小学日本歴史』（1903年）では「英雄の割據」の章で戦国の「諸英雄」を列举し、上杉・武田の二人は「いづれも軍のみちにすぐれて」、しばしば川中島に戦ったが勝敗は決しなかったと書いている⁽⁴⁹⁾。1911（明治44）年の教科書は「戦国時代」の章で、武田・上杉両家の系譜を説明し、信玄と謙信の座像を大きく掲げた上で、二人が「いづれも戦術に長じ」、しばしば川中島に会戦したと書く⁽⁵⁰⁾。1920（大正9）年版になると、信玄の家柄や武功、智謀や領国統治について紹介し、片や謙信の武勇を書いたのち、川中島の戦いについて、馬上に拔刀する謙信と幔幕の前に立ち上がって迎撃せんとする信玄の絵が大きく描かれている⁽⁵¹⁾。1934（昭和9）年版になってようやく文章は口語体となるが、これでは依然として川中島の戦いの両将の作戦や戦闘過程が詳細に記述されている⁽⁵²⁾。1940（昭和15）年版は1934年版と内容はほとんど変わらないが、「戦国要地図（東国）」がのせられたことに加

えて、1920年版にあった両雄対戦図がそっくり復活している⁽⁵³⁾。謙信が甲州に塩を送った話は1920年版から出てくるが、「人々は謙信の情のあついのに深く感じた」(1940年、157ページ)という文章や、信玄の死を聞いた謙信が「よい相手を失ったと言って、惜しんだ」という文章を読んで、筆者やTは謙信が好きになったのだと思われる。昭和期の歴史教科書は両将の武略をほめつつも、義と情の人として謙信に軍配をあげているようにみえる。

戦後の歴史教科書は、戦国武将のことや戦闘場面などを詳述するようなことはしなくなった。歴史学界の動向を反映して、経済史や社会史の方向に傾斜していった。これに対して政府の文教政策が保守化していく中で、伝統文化を尊重する文化史や「人間が出てくる」人物史が重視されるようになった。戦前の歴史教育を受けた親たちの中にも、「信玄や謙信について何も知らない」今の子どもたちと共通話題を持てぬ寂しさがあつた。そして戦後教育でそだった無知な子どもは大人になって、大河ドラマのヒーローやヒロイン、戦闘場面に感興をおぼえ、歴史知識の空白を埋めることができた。チャンバラ史観はテレビというメディアの力を借りて復活し、民衆の支配的常識となったようにみえる。

戦後の歴史教育が科学的真実を教えることに努め、感情や評価を極力禁欲し、教科書が客観的記述に終始したのは、戦前の愛国史観・天皇史観・道徳史観に対する反省として十分意味のあることであつた⁽⁵⁴⁾。しかし、歴史という科目は、5 W (Who, When, Where, How, Why) について暗記することだと子どもたちに思わせ、しかもいちばん大切な Why についての自主的考察を行なう学習が不十分だったことは反省されねばならない。生徒が疑問を発し、問題意識が育つようにしなかったことこそ、戦前の歴史教育の最大の弱点であつた。信玄・謙信は「おのおの大志を抱きて、近畿に攻め上らんとせしが」(1903年版)「おのおの折りを見て京都に上り、將軍を奉じて天下に号令せんと志せり」(1920年版)・「折さへあれば京都に上つて、天下に号令しやうと望んでゐた」(1934年版)・「折さへあれば京都に上つて、朝廷の命を奉じ天下をしづめやうと望んでゐた」(1940年版)といった歴史教科書の記述における、「大志」・「号令」などの意味するところについて、十分学習を深めるべきだったのである。

それを言うのは、戦前少年時代の筆者の意識の中で、戦国時代の英雄たちの他国侵略は近代日本帝国のアジア侵略と、天下制覇は八紘一字の世界支配と、イメージでも論理でも直接つながっていたからである。占領した国で信玄が善政をしたという話は、朝鮮や満州、南方諸地域における日本軍政のあるべき姿として聴き、謙信の情は被占領地の人びとに対する仁政の教えとして学んだのであつた。恥ずべきことに、「大志」や「号令」をそのまま肯定し、いささかの疑問や批判もなく、「東洋永遠の平和」を理想としたのである。武田軍によって進攻された被占領地としての諏訪などという観念は、郷土史の教師にも教わっている生徒の中にもまったくなく、むしろ強

者・英雄としての信玄に同一化していた。こんなに大河ドラマにはまっている大人たち・同郷人たちが、かつての筆者のように無批判・無自覚に、戦国時代や英雄を肯定するのであれば、平和・人権・民主主義を旗印にしてきた戦後教育は無意味だったことになる。

戦前の日本の社会と戦争に対する反省の上に立って、戦後60年にわたってこの国と郷土をつくってきたわれわれの立場からすれば、戦国時代というのは戦乱の時代、詐謀と虐殺が横行し、多くの貴重な文化財が破壊され、民衆が苦難に喘いだ、暗黒の時代、忌むべき時代としてとらえられるべきであろう。この時代の花形だった武将や軍師は、現代人にとって憧憬の対象とすべきものではなく、その非人間性・非論理性において反面教師となるべきものである。善人しか少年のための伝記物の主人公にはなりえないが、大人はむしろ善人物語に退くつし、血みどろの殺人事件を描いたサスペンスを好み、悪鬼のような登場人物をおもしろがる。歴史小説や大河ドラマでも同じであろう。ふた目とみられない醜男が、終生美姫をひそかに恋い慕うなどといった筋書は、西洋中世の騎士物語や近世のロマンのテーマであり、忍ぶ恋のストーリーは井上文学でこそ読むにたえるが、大河ドラマの具体的映像の演技で見ればしらじらしく、こっけいでさえある。歴史のロマンなどという浅薄な宣伝文句にだまされることなく、戦争の悲惨さ、不条理を見ぬくりアリストの眼を持たねばならない。

今だに公民館の歴史講座に、チャンバラ史観を超えていない「学者」や細部実証主義の大学教授が講師として招かれている。講談まがいの話に罪はないとも言えないのは、上記したとおりである。しかし、ほんとうの専門家たちははるかに進んだフロンティアで、新しい学問を創造している⁽⁵⁵⁾。少なくとも、創造しようとして励んでいる。そこでは地域史とはその地域に住んでいる人びとのためのものであり、その地域を特徴づけたり、誇れたりするのが地域史でなければならない、と考えられている⁽⁵⁶⁾。とはいえ、戦前の郷土史のように、天皇家につながる高貴な人びととの特別な結びつきとか、郷土の勤皇家の事跡顕彰とか、天皇制国家の体制を下から支えた淳風美俗の称賛というような「お国自慢」的なものであっていいはずはない⁽⁵⁷⁾。さればとて、1970年代からさかんに言われた「地方の尊重」・「地域のアイデンティティ」などの政治的言説が真に地域の独自性や自己主張を大事にしようとするものであったかは疑問である。地域の歴史的文化財を単なる観光資源として、集客に利用しようとした「地域開発」政策の愚劣さについてはすでに述べたところである。

当地における「風林火山」フィーバーの中で、歴史を地域おこしにつなげようとするまじめな講演会も開かれた。筆者はそういうスタンスに好意を持ち、講演会に出席してみたのだが、結果的には失望しただけに終わった。そのひとつは、広域行政事務局が主催したもので、「武田信玄と信濃・諏訪」と題して、高名な民俗学者が講師であった。諏訪郡市の市町村長や議員たちが招かれ、また各役場の職員も参加した大盛会で

あり、広域連合長でもある Y 市長が開会のあいさつで、「本日のお話で歴史のロマンに胸を躍らせ、また地域おこしに役立てていただきたい」と語った。ところが講演は冷静な歴史学的講義であり、聴衆の感動を喚起するようなものは何もなく、最後のところとってつけたように「風土に適した地場産業」として、新田開発、海苔・綿布・寒天関係・ハイテク産業などについて話した。講演後の質問も地域おこしとは無関係な、単に歴史的興味からするものであった。

もうひとつは、郡内博物館の共催による「信玄と諏訪」と題するシンポジウムで、「基調報告」が 5 本行なわれたあと、「諏訪の歴史を活かした地域づくり」なる「記念講演」をある大学教授（歴史学者）が担当した。基調報告は学芸員や博物館長などがそれぞれちがったテーマのもとに前後の脈絡なくしゃべったので、六番目の登壇者である記念講演者が、五つの報告をまとめて歴史的知見を地域づくりに活用する方法について示唆することを期待した。ところが記念講演は、戦国時代は気候異常と災害によって食料が不足したので、それを奪い合うために争乱が起きたこと、信玄の諏訪神社に対する信仰には、信濃統一を目ざす支配の手段という功利的な一面があったことを語り、現代の人間としては平和を大切に、自然災害に備え、環境問題を解決せねばならないと、情熱を込めて訴えた。もちろん、彼の主張は少しもまちがっていない。しかし、国際政治論や災害防止論や環境問題を歴史家である彼から聞いても仕方がないのである。じじつ、もっとすぐれた講説をその道の専門家から聞いている。そもそもこの歴史家の講演は、戦国史から学ぶというのではなく、当時の戦争の悲惨さや民衆の苦しみを十分認識した上で戦争批判を行なったのではない。そして当地の地域おこしへの具体的な示唆などなく、ごく一般的な諸課題が並べられたにすぎない。

ここでとりあげた講師たちは、いずれもまじめな研究者であり、多くの業績をあげて社会的評価も高い人びとである。たまたま講演を聞いた筆者を満足させなかったとしても、こちらの方の期待や聴解能力の問題かもしれない。しかし、かつて信州大学の歴史学の教授として令名のあった塚本学氏が弟子に語ったという、「本当の歴史を研究する人は、いわゆる専門家であってはいけなのではなからうか」ということばがしきりに想起される⁽⁵⁸⁾。専門家がよしんばだめだからといって、単なる趣味人や愛好家が「本当の歴史」に迫れる訳ではないであろう。市民として現代社会に向き合い、そこでの諸課題を解決すべく日々取り組んでいる人、すなわち日常生活で現代史を創造する歴史的主体としての市民こそが、過去をしっかりと見つめ、現代につながる課題を見いだすことができるのではないか。現代社会における生活を離れて過去の詮索に逃避したり、過去を現代とはまったく別な異次元の世界としてとらえ、批判の埒外にあるものとして受け入れるような姿勢では、現代人にとって意味のある歴史は記述しえない。専門的史家であろうと素人歴史家であろうと、好事家として歴史の世界

に埋没するのでなく、歴史に規定されながら新しい未来をつくっていく、創造的・能動的主体として、こんにちの歴史的諸課題に立ち向かっていかなければならない。

<注>

- (1) 本年行なわれた地方選挙の市議選では、合併問題との関連で市議の定数が減り、未曾有の激戦となった。これまではひとつの区の推薦で勝てたのに、今回は数区の推薦がなければ勝てぬということで、推薦獲得が決め手となった。こうして区役員の締めつけのきびしい区営選挙の様相を呈した。

区の役員の中に「神社総代」が置かれているのは、ムラの鎮守の維持・祭礼、郷社と諏訪神社の祭礼等の担当としてである。こうしたうぶすなの神だけでなく、伊勢神宮のことにまで関与するようになると、祭政分離の原則に抵触してくる。明治維新後、国体明徴・大義名分ということで国家神道、官・国幣社制度が作られ、しかも神道は宗教の枠外に置かれたのであった。このたび行政ルートによる回覧という方式で配布された「伊勢神宮式年遷宮奉賛会設立趣意書」や「ご奉賛のお願い」を見れば、そこには明らかに一種の歴史観がある。「古来私たちは、神宮を民族の魂のよりどころ、日本の総氏神と崇め、広大な神恩に感謝すると共に、国家・国民の永遠の繁栄と平安を祈ってまいりました。」「式年遷宮は古来、国家の重儀として国費をもって行われてきましたが、昭和二十八年の第五十九回のご遷宮以来、時代の趨勢に従い民間団体である奉賛会の募財協力によりとり行われてまいりました。」国際化が求められている現代、伝統文化を再現できる機会だというのが、式年遷宮の意義だとされている。上引の文章は歴史的事実に反しており、また祭政一致・国家神道が思想・信仰の自由を侵すものとして戦後に廃止されたことを「時代の趨勢」とぼやかしている。「民族」という概念が成立するのは近代以降のことである。

- (2) 歴史学習の目的や意義について、子どものための歴史書はつぎのように説明している。「過去のことを知らなければ現在のことはよくわかりませんし、未来を考えることもできません。先人のあゆんできた道をふりかえることによって、いまの世の中をみつめ、これからわたしたちの生きていく道を考える、そこに歴史を学ぶことのたいせつさがあります。」(信州大学教育学部歴史研究会編『おはなし長野県の歴史』信濃教育会出版部、1989年)。「歴史を学ぶということは、古いことについて物知りになることではありません。あなたがたが、これから、それぞれ自分の生き方を悔いのないものにしていこうとするとき、ひじょうに役に立つたいせつな手がかりが、歴史のなかにはいっぱいあるのです。その宝石のような手がかりを、あなたがたひとりひとりがどう掘り出すか、それによって歴史は生きたり死んだりします。」(上田薫監修『史跡と人物をつづる長野県の歴史』光文書院、1979年)。まったくそのとおりなのだが、本の内容を見ると宝石ばかりではないし、手がかりがどこにあるのかなかなか見つけれない。その見つけ方や掘り出し方について、せめていくつかの事例で示してもらいたい。先人のあゆんできた道をどうふりかえれば、いまの世の中のことが正しく見えてくるのか、自分のこれからの生き方にどうつなげていけばよいのか、教えてくれないとわからない。考え

- るのは各自で、すべての人にあてはまる正しい考え方などないのだとしても、テキストの記述は史実の提供だけで、歴史的思考の範示にはなっていないのである。
- (3) 占領期社会教育の研究はふるくから行なわれてきたが、近年になってもPTAをめぐる占領軍の政策とPTAの実態をめぐる実証的研究が進められている（越川求「地域教育計画論とPTA」＜日本社会教育学会第54回研究大会レジュメ＞2007年、1～3ページ）。
 - (4) 「『山梨県へ行ったら信玄とよばなければ……』と他県の人たちが信玄の呼び方に気がつかうという伝説は、いつごろ作られたか」（磯貝正義他『山梨県の歴史』山川出版社、1973年、5ページ）。上野晴朗他『風林火山の帝王学』プレジデント社、1988年、55ページ。秋山敬（山梨郷土研究会常任理事・武田氏研究会編集委員）は、「純粹甲州人」を名のっているが、甲州では信玄公と呼ばないと怒られるのかという質問には、公をつけなければ気のすまない人はまったくの少数派で、自分や自分の仲間にそんな人はいない、と答えるという（『武田信玄を歩く』吉川弘文館、2003年、211ページ）。
 - (5) 日本歴史学会編『地方史研究の現状』2（中部・近畿編）吉川弘文館、1969年、122ページ。
 - (6) 上野氏は1923年山梨市生まれ。山梨県立図書館郷土資料室などに勤務した。NHKのドラマ「武田信玄」の時代考証担当。信玄関係の著書は多数にのぼるが、ここでは『武田信玄に学ぶ』（新人物往来社、1974年）・前掲『風林火山の帝王学』を主に参照している。
 - (7) 「瀬沢合戦」というのは、1543（天文11）年3月、諏訪頼重が村上義清・小笠原長時・木曾義昌と共に甲州侵略を行なうべく、甲信の堺界である瀬沢に駐留したところ、晴信の奇襲にあって大敗を喫した、というものである。『甲陽軍鑑』では信州連合軍の戦死者1671人という。実証にきびしい歴史家は、この戦争を否定している（たとえば、渡辺世佑『諏訪史』第3巻、諏訪教育会、1953年、326ページ）。晴信が行なった諏訪侵略（同年6月）が、この戦争を虚構することで正当化されるという狙いでのフィクションであろう（磯貝正義他校注、〈戦国資料叢書3〉『甲陽軍鑑』人物往来社、1965年、412～6ページ）。新田次郎は、晴信がこの連合軍を長坂で迎撃し、百姓たちの投石と倉科党の突撃によってうち破った「長坂戦争」に仕立てている（新田次郎『武田信玄』風の巻、文芸春秋社、1987年、111～6ページ）。
 - (8) 諏訪衆というのも一枚岩でなく、信玄にいちはやく随順し、忠勤を励んだ千野靱負尉もいれば、武田に反抗して死んだ諏訪満隆（頼重叔父）や千野山城入道のような例もある（前掲『諏訪史』3巻）。
 - (9) 笹本正治『武田氏三代と信濃』郷土出版社、1988年、161～72、200～1ページ。
 - (10) 芝辻俊六『信玄の戦略』中央公論社、2006年。芝辻氏は1941年山梨生まれで、早稲田大学等の講師、信玄と武田氏に関する著書・研究論文は多数であるが、上記最新作を参照した。
 - (11) 平山優『武田信玄』吉川弘文館、2006年。平山氏は1964年東京生まれであるが、山梨県史編纂室主任など、長く山梨県在勤である。
 - (12) 奥野高広『武田信玄』吉川弘文館、1959年、37ページ。渡辺世佑は、「武田・村上両氏の兵は早くその鋭鋒を避け出兵しなかった為に頼重のみその部下を率いて出陣」とか、「上杉憲政が海野平に出た際に武田の兵が諏訪氏を棄てて顧みなかった」とか記述している

(前掲、『諏訪史』第3巻、274～5ページ)。

- (13) 上掲、『武田信玄』56～7、184～6ページ。天正18(1590)年、諏訪郡塩沢村の「検地野帳」に見られる農民逃散・作付減少については、『語り部文六覚書』(私家版、1994年、25ページ)参照。
- (14) 同上、107～8ページ。
- (15) 信州郷土史家の先覚者だった栗岩英治(1878～1946)は、「恥辱の血戦場の展望台を作ろうとする」・「かような馬鹿な県人はどこにあるだろうか」と長野県人を嘲罵した(「信玄崇拜と信濃人」<『信濃』第一期、1巻9号、301ページ>)。高島城は川中島とちがって諏訪人流血の史跡ではないが、日根野による凄まじい使役・搾取の記念物である。その怨念を漂わせぬ、ただの観光施設になっている。高島城の復興は、期成同盟会が寄付金を募集し、1970年に完工した。「復興天守については功罪いろいろあろう。……鉄筋コンクリート造りにして、観光資源としての意味を、ある程度盛り込まざるを得ないのも、やむを得ないかも知れない。」(植村佐『諏訪高島城』日本城郭協会、1970年、80ページ)。植村は、「城郭建築の復興としては、そこに学問的疑問が残る」としながら、その眺望はすばらしいと述べてがまんしている。
- (16) 小坂観音院に「由布姫」の墓所ありと地元の人たちが主張する根拠は、お年寄りが子どものころこの墓のまわりを「お姫さま、お姫さま」と口ずさみながら遊んだことで、井上靖に便乗した立札が立っているという(矢島勝『弓箭の国』5 信濃戦国記、私家版、1977年、57ページ)
- (17) このタイプの兜が江戸期に想像で描かれた信玄像をモデルに作られたものであることは、藤本正行『武田信玄像の謎』(吉川弘文館、2006年、34～6ページ)参照。
- (18) 倉島至『大嶺城』私家版、1992年。
- (19) 蓼科書房刊行、「諏訪史談会叢書第一輯」となっている。著者は教職を退いて農業に従事しつつ各種の審議会・委員会の委員をつとめていたところ、郷土史家矢崎孟伯のつよい要請で執筆にふみきったという。教員時代から諏訪郡史編纂委員となり、初代主任の今井真樹が死去したあと、次代の主任となったが、1950年3月に没した。この委員会の東京主任は今井登志喜東京帝大教授で、「諏訪史料叢書」37冊を出版したほか、『諏訪史』1・2巻を戦前に刊行した。
- (20) 本の奥付では、著者兼発行者は諏訪教育会となっており、「諏訪叢書」の一冊とされている。「歴史観の変転に伴う内容の吟味、検討などにて編集は極めて難事」だったというが、中世史に関して言えば、それほど新しい歴史観は見えない。
- (21) 今井の著書が出版された前年、渡辺世佑の『諏訪史』第3巻が出版された。今井はこの本の出版主任の一人として、刊行の業務に当たった。諏訪郡史の刊行は1918(大正7)年に企画されたのであるから、35年もかかったということになる。そっくり引き写しというほどではないが、今井の本は渡辺の本の影響をつよく受けている。田中義成の弟子として実証主義者である渡辺は、史料批判をかなり厳密にやって信用のできる史書を作ろうとした。だからこそ刊行までに長年月を要したのである。ただし、この本の実際の執筆者は、渡辺の弟子で信州出身の宝月圭吾だといわれている。渡辺は信玄の経綸と教養をほめちぎった人物であるが、『諏訪史』においては信玄礼賛をあまりやらず、史論も

あまり展開していない。しかし、信玄について「不世出の英雄」とか「近代稀に見る英武の将」などと評し、頼重については凡将ならずとしながらも、「徒らに血気にはやるのみにて深謀遠慮に乏しかった」・「徒らに奢侈にして容易に人言を聴かなかった」・「領民の信頼を得なかった」等々、その欠点をあげて敗戦の理由としている。この部分の著者の所論は実証的とはいいがたく、晴信進攻の不当性にはまったくふれず、諏訪人としての歴史にはなっていない。しかし中央の史家としての渡辺の権威に郷土史家たちはひれ伏してしまったのである。栗岩英治は、信州人の事大主義に怒り、かく言う。「博士だのバカセだの云ふ連中や、中央の所謂名士といふものを無上に有難がって、……却って彼等の蹂躪に任せつつあるの事実を気づかない」（前掲「信玄崇拜と信濃人」）。

- (22) 諏訪史談会発行。著者は川中島小学校や郡内の学校の教員を務めたが、とくに信玄について専門的な研究をした訳ではない。郡史編纂委員会で牛山秀樹のあとの主任。
- (23) 細川隼人『武田信玄と諏訪』253ページ。
- (24) 同上書。86～100ページ。今井登志喜『歴史学研究法』東京大学出版会、1991年、90～148ページ。ところが、今井が史料としてはあまり信を置かなかった『甲陽軍鑑』にもとづき、幼児期の母親の昔話を思い出して、「瀬沢合戦」を実在と信じたのだから、どうしようもない（24～6ページ）。武田の諏訪進攻についての記述や論評は、渡辺世佑の『諏訪史』の模倣である。
- (25) 同上書、50ページ。しかし、この記述も渡辺からのものまねにすぎない（『諏訪史』3巻、305ページ）。
- (26) 竹内丈夫「武田氏治下の諏訪」＜『風林火山』第7号、1988年4月＞。
- (27) 同「提言」＜『風林火山』第3号、1980年4月＞。
- (28) 同「苗字について」＜「民族資料館委員原稿」1975年。同「小笠原氏と竹内・武田姓」（執筆年不明）。同「家系の根元」＜同＞。以上、竹内の論稿は『茅野』第43号、「竹内丈夫先生遺稿集」（茅野市郷土研究会、1996年）に収録されている。
- (29) 海音寺潮五郎・新田次郎「謙信と信玄」＜『日本史探訪』 9 戦国の武将たち、角川文庫、1983年＞。
- (30) 新田次郎「武田信玄 武田勝頼」＜『歴史と人間』日本放送出版協会、1978年＞。
- (31) 新田次郎は『武田信玄』で、武田軍の諏訪進攻を正当化するために、天文十年の武田・諏訪・村上による佐久・小県への共同出兵の際に、諏訪軍が勝手に行動し、不審な動きがあったこと、帰途に就いた武田軍を襲おうとしたこと、小笠原らと連合して信虎追放後の武田に攻撃を仕かけたことをあげている。また、頼重の切腹については、囚われていた頼重が弥津元直の娘に書簡を送って、逃亡・再挙の企てを述べたためだとしている。信玄と頼重が佐久戦争のとき共にこの娘に懸想し、張り合ったという通俗小説の筋書きになっているが、上記のことは史実でない、まったくのフィクションであることは言うまでもない。新田の『武田信玄』はもちろん小説であって伝記ではないので、いかに荒唐無稽のことを書いても「創作」ということで弁護できるが、それがあたかも史実であるかのごとく受け取られることで、読者さらにテレビドラマの視聴者に誤った歴史意識を形成するのである。

新田次郎の作品の影響力ということでは、彼の作品そのものもさることながら、これ

を「原作」とした漫画本に注目したい。原作は4巻ないし8巻の超大作なので、それを読破するにはかなりの根気があるが、横山光輝の『武田信玄』は、1987年から刊行された講談社本や2005年から出た同社本があり、さいとうたかをにも1987年に刊行されたものと2002年の「アンコール発売」本（いずれもリイド社）がある。二人の画風の違いで、信玄の顔はまるっきりちがって描かれているが、ともに好男子になっている。これに反して頼重は凡庸な中年男ふうに描かれ、信虎はまさに妖怪そのものである。漫画はこうして、悪玉・善玉を絵で描き分け、読者に固定観念を刷り込む。石井進監修の「まんが信州の歴史」の中世編『2 武士の世の中』（信濃毎日新聞社、1993年）は、歴史研究をふまえた上に教育的配慮も加えて内容構成した良書であるが、これには諏訪に進攻する晴信が目玉の大きな意志の強そうな顔に描かれ、頼重の方は端正だが平凡な顔立ちになっている。川中島決戦の際の信玄は、「高野山・成慶院」像に近く描かれているのに、謙信は凛々しい若武者ふうに描かれている。漫画の画像とはかくも感情的ないしイデオロギッシュに描かれているのである。上掲石井進監修『武士の世の中』では、川中島の前後10年間の戦いで田畑を蹂躪された百姓が、「こんな戦ばかりでは暮らしていけん」・「村を捨てよう」と話し合っている場面もあり、武田の諏訪進攻の話のあと、「親せきだからといっても油断できないのね」・「うん、弱肉強食の時代みたいだね」というコメントが付いている。

新田次郎と比べれば、はるかにマイナーな作家の作品ではあるが、佐藤喜男著『憎しや！武田』（信濃書籍出版センター、1992年）という本がある。本の表紙に「壬申歳（平成4年）諏訪大社式年造営御柱祭記念」と記されているが、諏訪神社や御柱祭実行団体の委嘱によって作られたものではなく、ひとりの作家によって書かれた小説である。著者は1930年新潟県生まれ、信濃毎日新聞社・日刊工業新聞社に勤務したのち、作家となり諏訪市に住んだ。サブタイトルは「信濃戦国奇談」となっており、いちおう史書を参考にはしているが、通俗小説ふう仕立てられている。内容は、信玄による諏訪・信濃支配から勝頼の敗死、諏訪家の復活の物語である。著者のスタンスは本の表題によって明らかであるが、本の中からいくつか拾ってみよう。「この於美姫は後に諏訪御料人と呼ばれる程の麗佳人となり、その美貌が禍いして、武田晴信につけ狙われて側室にされてしまうのである。」（9ページ）・「甲斐の武田は、可能な限りの権謀術数を弄し、常に周辺諸国の弱みにつけこみ、領地を侵略、拡張しながら、戦力を貯え、最後は天下に覇をとえんとする野望を持ち、専ら富国強兵策に狂奔していた」（11～2ページ）・「肉親さえ欺かざるを得なかった、動乱の戦国時代とはいえ、度重なりと何時かは我が身に災はふりかかるという、天の攝理をまったく無視しているかのような、信玄の振舞いであった。」（88～9ページ）・「霊峰、霧が峰にお在ししていた天地の神々も、信玄が犯した数々の悪業を、一部始終見通して、その天網は恢々疎であっても洩らさなかったのである。」（152～3ページ）。

(32) 渡辺世佑『武田信玄の経綸と修養』1929年。戦後の1971年、新人物往来社から復刊。

(33) 前掲、上野晴朗『武田信玄に学ぶ』77～92ページ。

(34) 池島信平編『歴史よもやま話』日本篇・上、文芸春秋社、1966年、247ページ。「川中島の戦」をテーマに、高柳光寿・田中誠三郎・中山義秀の鼎談になっているが、謙信・信

玄についての地元評価を発言したのは田中（松代史談会長）である。

- (35) 藤森栄一『長野県人』新人物往来社、1973年、177ページ。
- (36) これは藤森の誤りで、諏訪勢・信州勢は武田軍の最前線に立たされていたので、日和り見やサボタージュができる訳もなく、消耗ははげしかった。塩尻峠の戦（天文17年）の際、西方衆は晴信に叛いたが、千野・波間などの諏訪勢は武田軍の一員として奮闘し、戦功をあげている（前掲『武田信玄と諏訪』93～5ページ）。勝頼の時代には諏訪衆が忠勤をはげみ、長篠の戦（天正3年）や烏居峠の戦（天正10年）で戦死した諏訪勢がいるし、高遠城の戦（天正10年）で死んだ諏訪勝右衛門夫妻の勇戦は有名である。
- (37) 藤森栄一「新信濃風土記——諏訪」＜『藤森栄一全集』第6巻、学生社、1980年、357ページ＞。
- (38) 塚田正朋『長野県の歴史』山川出版社、1974年。この本では瀬沢合戦など無視している。塚田は新潟県生まれだが、長野在住で、県史編纂事業の中心にいた。塚田のような客観的でクールな叙述は、古川貞雄他『長野県の歴史』（山川出版社、1997年）にも引きつがれているが、川中島の戦が終わり、善光寺平を支配するようになったのちの永禄10（1567）年8月、信玄が甲信・西上野の配下武將に起請文を書かせ、小県郡下之郷社に奉納したことについて、「神仏起請にたよらざるをえないところに、この時期の武田領国の到達点と矛盾が示されている」と論評を加えている（135ページ）。しかし、武田の統治は今川・上杉などよりも先進的な側面が多かったと評価する。
- (39) 小林計一郎『武田軍記』人物往来社、1967年。
- (40) 小林のような評価を長野県人の代表的意見のように誤解されてはならないので、ここでこれまでしばしば引用してきた栗岩英治の所論をまとめて紹介することにしよう。栗岩英治は、飯山の生まれで正規の教育はほとんど受けず、青年時代から壮年期は東京・朝鮮・サハリンなどでさまざまな仕事をし、52歳で長野に帰り、郷土史の研究に専念、『信濃』誌の編集や『信濃史料』の編纂ですぐれた実績をあげた人である。彼は「信玄崇拜と信濃人」で信州人の間で今だに信玄・謙信優劣論がさかんなことについて、両者共に戦国時代の大々の傑物であるけれども、信州の武將たちは信玄に追われて謙信に援助を求めたのだから、その先鋒となって失地回復のために戦うのは当然だが、信玄は降伏を余儀なくされた信州人を使って越軍先鋒の信州人と戦わしめたのだから、謙信に信州人が怨みを持つ理由はなく、信玄には残虐の限りを尽くされたのだと判定する。祖先たちが自己の意志に反して相打ち相殺した修羅の戦についての放送を楽しんで聴くばかりか、流血の戦場跡を見物場にして金を儲けようとする信州人は馬鹿だと栗岩は罵倒する。本来ならば、信州人は川中島の軍談など拒否して当然なのに、信州の史家は川中島戦を第一にとりあげるのはどういうことかと彼は言う。信州人に信玄謳歌の人の多い理由として、栗岩はまず信州は既に鎌倉時代初期に甲斐源氏の一族の小笠原氏が信濃に入り、足利時代に信濃守護になったように、甲州勢力によって支配されてきたのであり、第二の甲斐侵入軍たる武田がこれと交代したのだと言う。武田は信州古来の名族、諏訪・仁科・知久を欺いて殺すという、毒手中の毒手を用い、戦慄の極みというべき所業によって信州を植民地化した。甲斐系植民者は信州の上流・支配者となり、敗者・文盲の信州人は彼らの給人となった。さらにかつて小氏人の角逐としての戦乱に悩まされた信州人

は、武田の強大な覇権による秩序維持に安堵した。——信州人は無意識に甲州人の奴隷たることに満足する事大主義の権化なのだ、と栗岩は激語する。信玄批判が現代信州人批判にならざるをえないところが、信州人の悲劇なのである（栗岩の論文を教示してくださった畏友長田通倫氏に深謝する）。

- (41) 下村正樹の文、柳沢京子の切り絵で、第一法規出版、1991年刊。善光寺の仏像が甲越両国に移された問題は、当然多くの史書が扱っているが、「甲越両勢力の抗争によって本尊は流転を余儀なくされ」、川中島合戦によって善光寺は「荒廃を余儀なくされ」と、被害者意識めいた叙述をしている（前掲、塚田『長野県の歴史』117ページ）。それに比べると『善光寺物語』には奪略者への怒りがにじんでいる。

笹本正治氏は、善光寺の甲府遷座が可能になった前提として、その本尊が三国伝来の仏で元来信濃に存在したものでなく、その仏がいる所がそのまま善光寺になるという考え方があったこと、本田善光・善佐が皇極天皇からそれぞれ信濃守・甲斐守に任ぜられたといわれることをあげている。信玄の意図は、如来を身近に置くことでその加護を受け、一門の繁栄と戦争勝利を願ったことと、全国的な信仰の対象となっている善光寺を直接支配下に置くことで自己を権威付け、領国支配のための手段としようとの狙いだったと言う（前掲『武田氏三代と信濃』189～92ページ）。笹本氏の所説は必ずしも信玄擁護・遷座正当化のためのものではないだろうが、信仰対象・文化財の掠奪、政治権力による宗教の手段化として、信玄のエゴイズムは批判されるべきである。

- (42) 信濃毎日新聞社編『伝説のふるさと』同社、1992年、18～22ページ。佐久教育会編『佐久口碑伝説集』南佐久編、同会、1978年、192～3ページ。
- (43) 同上、『伝説のふるさと』13～5ページ。
- (44) 以下の寺社名は、主として笹本正治『長野県の武田信玄伝説』（岩田書院、1996年）に拠るが、一部は他書によって補っている。
- (45) 竹村良信『諏訪のでんせつ』信濃教育会出版部、1965年、58～64ページ。
- (46) 村のこばれ話百話編集委員会編『村のこばれ話百話』豊平老人クラブ連合会等、1972年、141ページ。
- (47) 甲府の大泉寺はもとからあった大川寺を信虎が1521年に改称・改宗させたもので、この話はまったく荒唐無稽であることは言うまでもない（『山梨県の歴史散歩』山川出版社、1976年、109～10ページ）。ただし、諏訪の郷土史家まで、御作田にあった大泉寺を信玄が甲州に移した、と書いている（前掲『語り部文六覚え書』242ページ）。荒唐無稽といえ、川中島の戦争が膠着状況になったので、両軍から相撲の選手が出て勝敗を決しようということになり、結果は越軍代表の選手が勝ったことで、「川中島一円の地が上杉氏の領有することになった」（村沢武夫『信濃伝説集』山村書院、1943年、46ページ）という伝承がある。また、甲軍に攻められた信州の諸城が水の不足に悩まされたとき、城方は米で馬を洗って余裕のあるところを示したという話は各地にあるが、北信の葛山城（落合備中守が城主）のばあいは、近くの静松寺の住職が武田軍に内通し、城方の欺計を曝露したため、遂に落城した。城主はこの住職を深く恨んで死に、その後静松寺代々の住職は祟りを恐れて葛山には登らなくなったという（宮沢憲衛『信濃のはなし』信濃路、1972年、150ページ）。これらの伝承・民話は、北信の人びとの謙信に対する支持、甲軍

に対する反感の表現である。

- (48) 前掲、海音寺潮五郎・新田次郎「謙信と信玄」＜『日本史探訪』142ページ＞。前掲『歴史と人間』60ページ。NHKは、世間の風潮が保守的だと戦国時代を選び、革新的だと幕末・明治を選ぶという説が巷間にある。このところ、戦国時代が巾をきかせているように思われる。
- (49) 『小学日本歴史』二、1903年10月、18ページ。
- (50) 『尋常小学日本歴史』巻二、1911年11月、10～2ページ。
- (51) 『尋常小学国史』上巻、1920年10月、147～51ページ。
- (52) 『尋常小学国史』1934年2月、172～5ページ。
- (53) 『小学国史』1940年2月、155～9ページ。
- (54) 1943（昭和18）年版の『初等科国史』上では、皇室が不足がちな財政事情のもと儉約に努めたり、伊勢神宮の社殿再建にも「いろいろ御心をお用ひになり」、長雨・不作・疫病に苦しむ民草のために天皇が写経・祈祷したことを記したのち、「御恵みの光に照らされて、世の中は、しだいに明るくなつて行きました。各地の英雄もさすがに日本の武士でした。しのぎを削つて敵と戦ふかたはら、部下をいたはり人々をいつくしんで、よく領内の政治を整へました。戦ひぶりにも、しだいに、みがきがかかつて来ました」と記述する。英雄たちは都へ上って天皇の命令を奉じて全国を平定しようとしたこと、また皇室に「続々御費用をたてまつつて、勤皇の真心をあらはしはじめ」た武将として、大内・北條・毛利・織田などの他に上杉謙信の名をあげているが、信玄は洩れている（160～1ページ）。
- (55) 民衆史・生活史・感性の歴史」などの方向での開拓的研究として、笹本正治『歴史の闇に消えた戦国時代の民衆たち』（一草舎出版、2006年）などがある。著者は、自分たちがコントロールできない自然環境、権力者のパワー・ポリティクスによってふりまわされる民衆の姿ということで、戦国時代と現代とを重ね合わせている。この二つの時代は「大きな転換期」ということでは同一であり、戦国の「混乱期の中でも、人びとはたくましく生き続け、生き抜くために多くの知恵を絞ったはずだから」それに学ぼうと言う。しかし、著者のあげる知恵とは、金山開発・信玄堤などであり、民衆主体の意識変革ではない。領主のゲバルトが民衆の願いをふみにじった戦国時代とはちがひ、現代には民主主義がある。笹本が言うように、現代の民衆には主権者としての自覚や見識は欠けているのだろうが、ならば、民主主義が不在だった戦国時代についてわれわれが学ぶべきことは、権力者の恣意によって殺されたり、彼の策謀によって欺されたりすることの悲惨さを確認することであり、従来の価値観を根本的に変革するような思想の形成に努力することである。なお、戦国時代を民衆の視点から見て批判的にとらえる発想は、前掲、藤森栄一『長野県人』（177ページ）に示され、市川健夫監修「県別歴史シリーズ20」『長野県』（ポプラ社、1990年、23ページ）にもある。また、前掲、塚田『長野県の歴史』でも「戦乱と民衆」という小見出しで、善光寺平における農民の逃散と信玄が行なった還住の指示、また信玄の信濃侵入以来15年間にわたって兵伐がつづき、ために土民百姓が困窮していることを信玄自身が認めていたことを指摘している（116ページ）。
- (56) 郷道哲章「郷土史と信濃の中世城館」＜塚本学先生退官記念論文集『古代・中世の信濃

社会』銀河書房、1992年、75ページ>。

(57) 同上、76ページ。

(58) 同上、74ページ。